

ブラジル日系人実態調査報告書

平成 2 年 10 月

国際協力事業団

移 計
JR
90 - 11



JICA LIBRARY



1086806(5)

21819

ブラジル日系人実態調査報告書

平成2年10月

国際協力事業団

国際協力事業団

21819

まえがき

ブラジルへの日本人の移住は、明治41(1908)年6月18日に笠戸丸に乗って、コーヒー園雇農移住者781人がサントス港に上陸したのが始まりとされている。以後、第二次世界大戦勃発による移住の空白期をはさみ、平成2(1990)年3月末までに移住した日本人数は約259,000人である。

こうした移住者が長い歴史の上に築いて来たブラジルの日系人社会は、一世層の減少と相対的二世以下層の増加によって世交の交代が進むなど、近年、大きく変貌を遂げつつある。

ブラジル日系人社会の実態については、昭和33(1958)年にブラジル日本移民50周年記念事業の一環として実施された調査報告書「ブラジルの日系人」があるが、それ以来、今日に至るまで体系的調査はされてなく、新たな調査の実施について各方面から強い要請がなされていた。

移住事業部は、こうした背景と共に業務実施上の必要性もあって、昭和61年から3年計画でブラジル日系人実態調査を実施することとし、これをサン・パウロ人文科学研究所に委託した。

調査計画に当っては、日本の約2.3倍の面積を有するブラジル全土に居住する日本人移住者・日系人を対象にした調査方法が課題であったが、幸いブラジルの日系人社会に詳しい統計学者水野直氏(当時、日本工業大学教授)の指導により実施可能となったものであり、同氏の協力に対し心から感謝致したい。

調査は、調査地区のサンプリングに必要な資料の提供と調査実施に、ブラジル連邦共和国大統領府統計院の多大な協力と指導を得て順調に行われたが、調査員の方々には予想もなかった様々な障害に遭遇しながらも調査を進めていただきました。この直接指導に当たったサン・パウロ人文科学研究所のスタッフと調査員の方々のご努力に対し、心から敬意を表します。

本報告書の内容は、ブラジルの日系人口とこの経済的及び社会的側面についてとりまとめられたものであり、当移住事業部が委託した業務の成果品としてサン・パウロ人文科学研究所から提出されたものである。この報告書がブラジルの日系人社会を知る上で貴重な資料として役立つものと確信し、発行するものであります。

平成2年10月22日

国際協力事業団移住事業部

部長 楠木 功

目 次

序

1. 調査の概要

1-a 調査目的	1
1-b 調査対象	1
1-c 調査システム	1
1-d サンプルの仕組み	1
1-e 調査票及び調査員	5
1-f フィールドワーク	5
1-g 集 計	6
1-h 公 式	6
1-i 協力機関	7

2. 人 口

2-a 人口の地域的分布	9
2-b 都市・農村別日系人口の分布	13
2-c 年齢別日系人口	16
2-d 個人日系度別人口	18
2-e 世代別人口	19
2-f 配偶関係別人口	21

3. 経済的側面

3-a 主な活動内容	25
3-b 職業別人口構成	26
3-c 職業上の地位別人口構成	29
3-d 産業別人口構成	31
3-e 収入のある仕事の数別人口構成	34
3-f 経済階層別世帯数（最低給料を基準として）	36
3-g 農村不動産の所有状況	37
3-h 居住環境	39

4. 社会的側面

4-a 社会階層帰属意識	52
4-b 世 帯	52
(1) 世帯規模	52
(2) 世帯構成	53

4 - c	異民族結婚の現状	64
4 - d	言語	65
(1)	ポルトガル語・日本語の習得度別人口	65
(2)	家庭における使用言語	65
4 - e	教育程度	70
4 - f	団体加入	70
4 - g	宗 教	72
5.	用語の解説	75
6.	調査票及び関連書類	80

序

本報告は「ブラジル日本移民80年記念事業」の一環として、1987、1988年の2年間に亘って実施された「ブラジル日系人口実態調査」の集計結果の一部である。1987年度にはサンプル確定とその基本的調査がおこなわれ、1988年7月には、社会経済的基本調査が実施された。また、この二度の基本調査の間には数度の補充調査が行われた。

1987年6月の「移民の日」には、第一次基本調査の中間報告が行われ、ブラジル在住日系人口は1,168,000人(±22,000人)と発表された。しかし、その後、数度に亘って試みられた補充調査の結果、1987年7月現在の、ブラジル在住日系人口数は1,228,000人(±3,000人)と是正されるに至った。従って、本報告書では1987年の人口に関する数値はこの数を基礎としたい。また、1987年7月現在の日系人口は自然増加の結果、1,250,000人に増加したが、本報告書ではこれにサンプル世帯への転入日系人30,000人を加えた1,280,000人という数値を基礎に統計が作製されている。

この報告書で呈示される結果表は基本的なものである。調査結果はコンピュータテープに全てインプットされているが、その全てが集計されたわけではなく、その中の基本的な項目に関してのみ、集計作業が行われた。この意味に於いて、本報告書は中間報告書という位置づけを持つ。本報告書は調査の概要、人口、経済的側面、社会的側面、1年間の動きという項目から構成されている。本報告書には80葉程度の結果表が収められているが、これらはすべて男女別か都市・農村別か年齢別という指標から目次に示されたような項目が集計されたものであり例えば職業別×経済階層別、職業別×学歴といったクロス集計は全く行われていない。この意味に於いても、本報告書は中間報告書的性格を有しているといえる。様々な角度、側面からの多角的説明は近い将来に刊行予定である最終報告書の中で行われることとなろう。しかし、本報告書に於いてもブラジル全体や1958年に実施された日系人口調査の調査結果との比較が可能な項目に関してはこうした作業を可能な限り行っており、ブラジル全体との比較や30年間の変化をみることもある程度は可能である。

尚、本報告の記述はそれぞれの項目の冒頭で全般的な解説がなされ、必要あるいは重要と思われる結果表に関してはそれぞれの表の下部で個別的な説明を行うというかたちで統一されている。

1. 調査の概要

1-a 調査目的

本調査はブラジルに於ける日系人口数及び日系人の現状を把握するための情報を得ることを目的としている。

1-b 調査対象

本調査の対象はフェルナンド・デ・ノローニャ島（IBGP：1980年センサス人口、1,342人）に居住する者を除いた、ブラジルに居住する全日系人である。ここで日系人概念に言及すれば、ここでいう日系人とは日本人移民及び日本人のブラジル長期滞在者（旅行目的ではなくブラジルに3か月以上居住するかその予定である）とその子孫をさし、こうした日本人を祖先の一人として持っているブラジル在住の者を全て含んでいる。従って、この中には混血度のいかに問わず、混血日系人や日本企業の長期駐在者及びその家族員等も含まれることになる。

1-c 調査システム

本調査は経時的に行われるように計画されている。最初の調査では、主として以降に実施される調査のために基本的項目に関する情報を収集して、対象たるべき単位を確定する。以降の調査に於いては、既に日系と確認された単位を対象に日系人の持つ属性に関する詳細な情報を収集する。このような調査システムは、調査結果の質を確保するために、調査者と回答者の双方の負担を適当な程度としながら、調査費用を節約するという見地から採用された。

1-d サンプルングの仕組み

本調査を実施するに際し、調査単位の枠が存在しないために、地域的サンプルングに基づいてフィールドで新たに単位のリスト・アップをすることが必要であった。地域的サンプルングを行う上で、唯一の可能性はその規模は大きかったが、人口センサス用に設定された調査区（SETOR）の利用であった。調査期間や調査員数、調査費等を考慮し、短期間のうちにその地域内の調査が可能となるよう、SETORの地図上で地理的にいくつかの地域に区分し、それをSUB-SETORとした。単位の抽出は第1次抽出単位をSETOR、第2次抽出単位をSUB-SETORとする2段階で行われた。こうして抽出されたSUB-SETORにある全世帯が調査され、調査の対象たるべき日系人がフィールドワークを通じて確定された。

SETORは地域、都市・農村の区分、地域内での日系団体・地域日本人会の存否*そしてセンサスからの結果—日本生れの日本人の居住及び黄色人口の割合—に基づき、層化された。センサスから得られる他の結果—東洋系宗教への帰属—は層化目的には適切ではなかった。

全体で14万のSETORがIBGEのコンピュータにより103の層に層別され、約1,500 SETORが指定された割当て数に基づき、等確率選択で標本抽出された。この配分は等配分の場合よりも多数の日系人が含まれるよう適切なデータを用いて決定された。SETORのサンプルは以降の調査でサンプル数を変更することが可能であり、そしてサンプリング誤差の算定が容易となるよう、独立した3つのサブ・サンプル(A, B, C)から構成されている。

SETORの標本抽出の基本となった総人口に占める地域人口の比率、黄色総人口に占める地域黄色人口の比率、日本生れの日本人総人口に占める地域日本生れ人口の比率は表1-1に示されたとおりである。しかもこれらのデータにもとづくとともに、さらに都市・農村の区分、地域日系団体の存否を加えて層化されたが、その各層と層別の割当て数は表1-2に示されたとおりである。アマソナス州という地域を例に各層を説明しよう。まず、アマソナス州に属する全ムニシピオ(郡)がそのムニシピオ内に日系団体・日本人会の存否を基準に2つの範疇に区分された。次にこの区分と交差する訳だが、この2つの範疇がさらに都市と農村の区分で2つの範疇に分けられた。さらに地域日系団体を持たないムニシピオの集合は黄色人口、日本生れの日本人人口との組み合わせから、次の6つの範疇に区分された。即ち、

1. UJ - 都市部で日本生れの日本人が存在するSETORの集合
 2. $U\bar{A}$ - 都市部で黄色人口が存在しないSETORの集合
 3. UA' - 都市部で黄色人口は存在するが日本生れの日本人は存在しないSETORの集合
 4. RJ - 農村部で日本生れの日本人が存在するSETORの集合
 5. $R\bar{A}$ - 農村部で黄色人口が存在しないSETORの集合
 6. RA' - 農村部で黄色人口は存在するが日本生れの日本人は存在しないSETORの集合
- である。このような層を設定することで、日系団体が存在しないムニシピオの全SETORはこの範疇のいずれかに属することになる。

ところで、ロンドニア、アクレ州及びロライマ、アマバ州から構成される地域的層ではサンパウロ日本文化協会所有の地域日本人会リストによれば、他の東北部諸州(ペルナンブーコ、パイアを除く)と同様に日本人会がないと判断し、これらの州ではムニシピオを4つの範疇に区分した。即ち、

1. UJ - 都市部で日本生れの日本人が存在するSETORの集合
2. $U\bar{J}$ - 都市部で日本生れの日本人が存在しないSETORの集合
3. RJ - 農村部で日本生れの日本人が存在するSETORの集合
4. $R\bar{J}$ - 農村部で日本生れの日本人が存在しないSETORの集合

である。さらにサンパウロ市では都市・農村の区別はあまり意味を持たないので、全てのSETORから等確率でSETORが抽出されている。このような層から抽出されたSETORの数は上述のように表1-2に示されている。

上述のような過程で第1次抽出単位からの等確率抽出が完了された。続いて行われたのは

第2次抽出単位からの等確率抽出であった。すでに、前述したように抽出されたSETORはただちにSETOR地図上で地理的特徴等から複数のSUB-SETORに再区分された。そして、その再区分されたSUB-SETORから等確率抽出法で1つのSUB-SETORが選ばれ、それが本調査の調査地域一単位とされたのである。

*1987年当時に、サンパウロ日本文化協会に保管されていた地域日本人会のリストを利用した。但し、必ずしも全ての日本人会が網羅されているかどうかは明確ではないが、日本人会の存否は日系人口の集中度を示す目安として、取上げられたものに過ぎないのであり、当調査の統計学的厳格性とは直接的関連性はない。

表1-1 地域別人口比、黄色人口比、日本生れの日本人人口比及び日系団体の存否

	ESTADO	POPULAÇÃO	POP. AMARELA	POP. JAPONESA	ASS. JAP.
N	Rondônia	0,4	0,1	0,06	x
	Acre	0,3	0,1	0,02	x
O	Amazonas	1,2	0,6	0,6	o
R	Roraima	0,1	0,06	0,02	x
T	Amapá	2,9	0,02	0,05	x
E	Pará	2,9	1,2	2,14	o
N	Maranhão	3,3	1,2	0,07	x
	Rio Gr.do Norte	1,6	0,3	0,03	x
	Paraíba	2,3	0,6	0,06	x
R	Piauí	1,8	0,3	0,01	x
D	Ceará	4,4	1,2	0,04	x
	Alagoas	1,7	0,5	0,01	x
E	Sergipe	1,0	0,1	0,01	x
S	Pernambuco	5,2	0,7	0,2	o
T	Bahia	8,0	1,8	0,71	o
S U D E S T E	Minas Gerais	11,3	1,7	1,3	o
	Espírito Santo	1,7	0,1	0,23	o
	Rio de Janeiro	10,2	1,9	3,12	o
S P	São Paulo Grande S.Paulo	21,0	70,7	77,63	o
	Est.de São Paulo				
S	Paraná	6,4	11,8	8,96	o
U L	Santa Catarina	3,1	0,4	0,29	o
	Rio Gr.do Sul	0,5	0,9	0,99	o
C E O N E T S R T O E D.F.	Mato Grosso do Sul	1,2	1,5	1,75	o
	Mato Grosso	1,0	0,6	0,30	o
	Goiás	3,3	0,8	0,48	o
	D.F.	1,0	0,6	0,86	o

表1-2 層別サンプル数一覧表

	REGIO	Município sem Associação Ripo- Brasileira				Município com Associação				
		UJ	UA	RA	UA	U	R			
N O R T E	RODONIA	UJ	3	UJ	3					
	ACRE	RJ	3	PJ	3					
	AMAZONAS	UJ	3	UA	3	UA	3	U	9	
		RJ	3	RA	3	RA	3	R	9	
	BORAIMA	UJ	3	UJ	3					
		RJ	3	RJ	3					
PARA	UJ	12	UA	3	UA	3	U	18		
	RJ	12	RA	3	RA	3	R	18		
N O R D E S T E	MARANHAO R. GRANDE NORTE PARATBA	UJ	3	UA	3	UA	3			
		RJ	3	RA	3	RA	3			
	PIAUI CLARA	UJ	3	UA	3	UA	3			
		RJ	3	RA	3	RA	3			
	PERNAMBUCO	UJ	3	UA	3	UA	3	U	12	3 (PC) 9 (BA)
		RJ	3	RA	3	RA	3	R	12	3 (PC) 9 (BA)
S U D E S T E	MINAS GERAIS ESPTRITO SANTO	UJ	9	UA	3	UA	6	U		
		RJ	9	RA	3	RA	6	R		
	RIO DE JANEIRO	UJ	6	UA	3	UA	3	U	39	
		RJ	6	RA	3	RA	3	R	39	
	S P A U L O	BAIRRO (1)					264			
		GRANDE S. P. (2)	U	6	municipality	21	U	69		
R					3	R	6			
S. PADLO (Exceto (1)(2))	U			30	U	174				
	R			9	R	36				
S U L	PARANA	UJ	18	UA	3	UA	6	U	111	
		RJ	18	RA	3	RA	6	R	111	
	SANTA CATARINA	UJ	6	UA	3	UA	6	U	9	3 (SC) 6 (PS)
		RJ	6	RA	3	RA	6	R	9	3 (SC) 6 (RS)
C. O E S T E	MATO GROSSO DO SUL	UJ	3	UA	3	UA	3	U	21	
		RJ	3	RA	3	RA	3	R	21	
	MATO GROSSO GOIAS	UJ	3	UA	3	UA	3	U	12	6 () 6 ()
		RJ	3	RA	3	RA	3	R	12	6 () 6 ()
D. R.			3					9		

1-e 調査員及び調査票

1987年の第1次基本調査は応募した約700名の大学生の中から、面接で約110名の調査員が選任された。調査員は8日間、調査の方法、手段、要項、調査票その他の調査書類に基づいて、その業務につき研修を受けた。一部遠隔地にはIBGDの調査員が本調査の調査員として参加した。

この第1次基本調査のための調査票は4種類（その他に補助調査票が1種類用意された。即ち、A. 調査地域の世帯配置図、B. 調査対象地域に居住する世帯リスト（全世帯調査票）C. 日系世帯調査票、D. 系譜調査票（日系人確定のための調査票）である。これらの調査票の形式ないし調査項目に関しては6. 調査票及び関連書類の項を参照のこと。

1988年の第2次社会・経済的基本調査は前年度の調査員の中から、調査の能力及び日系人であることを考慮して、25名程度の調査員を選任した。というのは、第1次調査時に調査員が非日系人であることで調査に協力してもらえなかったケースが多くみられたからである。調査員は既に、この調査の目的等に関しては良く理解し、しかも多くの場合には前年度の調査地域を再び担当するという原則で調査地域の割当てを行ったことで調査地域への接近という点では困難はあまりなかった。調査員は前年度と同様、調査方法、手段、担当地域、調査票等に関する講習を数日間に亘って受けたのち、調査に出掛けた。

1988年度に使用された調査票はA. 世帯員の動きに関する調査票、B. 日系世帯調査票、C. 個人調査表(1), (2)の3種類であるが、前年度調査不能世帯に関しては、前年度の調査票も併せて持参させ、補充調査も兼ねた調査を実施した。調査票に関しては、6. 調査票及び関連書類の項を参照されたい。この両年度とも、調査での基本的使用言語はポルトガル語であったが、一部の日系人にはポルトガル語が不得手な被調査者がおり、こうした人達のために、日本版の調査票も準備した。

1-f フィールド・ワーク

1987年度においては、調査員には、調査票類と1980年センサス用に作成されたSETOR地図上に画定されたSUB-SETORが示された地図が配布されて、本部から派遣された。調査員には一般に距離と旅程の容易度を考慮して約7SUB-SETORのグループを調査担当地域として割当てた。約10名の調査員ごとに1名の指導員が調査員の業務の指導援助、コントロールの為、主として本部スタッフから選任された。500余りの調査地区を有するサンパウロ州ではフィールド・ワークは本部からの直接指導で実施された。フィールド・ワークは1987年7月16～31日の期間実施された。雨期のために到達が不可能であった1setorを除き、すべてのsetorからデータが収集された。

フィールド・ワークの事後調査の為、当初の全調査地域から部分標本が抽出された。同時にサンパウロ市、リオデジャネイロ市における大規模なアパルトメントへの接近が不可能と

いう理由で多数の非回答のケースが出現した既調査地域と、フィールド・ワークの割当て後に当初の標本地域が算定されたよりも少なかったことが判明した地域の追加標本のこれに加えて、結果の向上のため補足調査が実施された。こうした第2次フィールド・ワークは9月4～12日の期間に同一の調査時指定を以て実施された。

1988年度調査では前年に確定された日系サンプルのみを調査対象として、1988年8月にフィールド・ワークが実施された。調査員は前年度と同様に、1980年センサス用に作成された sector 地図上に画定された調査地域の示された地図および調査票額を持って、本部より派遣された。調査員には調査地域への到達の容易度を考慮して、20～40サンプルを一人の調査担当地域として割当てた。前年度のように、調査指導員のシステムは取らず、すべての調査は本部からの直接指導で実施された。1988年度の調査までに1年間の時間が経過しており、サンプルの移動のケースが多く出現した。調査員は基本的に移動したり、転出したりした個人サンプルを可能な限り追跡調査した。さらに、調査期間中にこうした追跡調査が不可能であったケースについては、その後、補充調査が行われ、結果の向上が目指された。

1-g 集 計

2年間にわたるフィールド・ワークで収集並びに調整された全ての調査票は、本部スタッフにより点検され、コンピュータ処理のために適当にコード化された。調査票のオリジナルデータのインプットは協榮ファコンによって行われた。コードのはいった磁気テープと関連資料はコンピュータ処理の為、日本へ送られた。多くの協議検討の結果、確認された製表手続きに従って、実際のタビュレーション作業は日本統計協会で行われた。日本の総務庁統計センターでは、専門知識とソフト・ウェアを含む技術を提供された。

1-h 公 式

X は考察する変数の計を表す。その添字 i, j, k はそれぞれ層、sector, sub-sector を示し、()のないものは母集団を、()付きはサンプルを示す。 N 及び n は、それぞれ母集団と標本における、添字によって示された次の段階の単位の数を表す。従って、 $N_i(j)$ は i 番目の層の、 j 番目のサンプル sector に含まれる sub-sector の数を示している。 m は使用されるサブ・サンプルの組数を示し、 h は h 番目のサブ・サンプルの組を表す。 h は対応する推定値を示す。

$$X = \sum_i \sum_j \sum_k \frac{N_j N_{ij}}{N_i} X_{ijk}$$

$$\hat{X} = \frac{1}{m} \sum_h \hat{X}_h$$

$$\hat{X}_h = \sum_i \frac{N_i}{n_i} \sum_j \frac{N_{ij}}{n_{ij}} \sum_k \frac{n_{ij}(k)}{n_{ij}} X_{i(j)(k)}$$

$$V(\hat{X}) = \text{Var} \hat{X} = \frac{1}{m^2} \sum V(\hat{X}_h)$$

$$V(\hat{X}_h) = \frac{\binom{m}{2} \sum (\hat{X}_h - \hat{X}_{h'})^2}{m(m-1)}$$

$$\hat{V}(\hat{X}_h) = \frac{\binom{m}{2} \sum (\hat{X}_h - \hat{X}_{h'})^2}{m(m-1)}$$

1-i 協力機関

*ブラジル日本移民80周年祭々典委員会はこの調査をその記念事業の一つに含めることを決定し、様々な協力を行った。

*ブラジル地理統計院 (IBGE) は特にサンプリングとフィールド・ワークの準備及び実施段階で専門技術的経験と資源を提供して協力した。

*協栄ファロンはタビュレーションシステムの問題を考慮して、データ入力段階で協力した。

*総務庁統計センターからはタビュレーション手続きの準備と確定の段階で協力を得た。

*日本統計協会からはタビュレーションの実行段階で協力を得た。

*アルファインテルツールズモからは特に結果集計のため、情報と資料の敏速なる伝達で協力を得た。

2. 人 口

2-a 地域別人口及び世帯数

- 表2-1 5大地域別男女人口構成
- 表2-2 5大地域別男女別人口構成の誤差限界表
- 表2-3 地域別男女別人口構成表—実数
- 表2-4 地域別男女別人口構成表の誤差限界表
- 表2-5 地域別男女別人口構成表—百分率%表示—
- 表2-6 地域別日系世帯数—実数
- 表2-7 地域別男女別人口構成—1958年—

2-b 都市・農村別人口

- 表2-8 都市・農村部別日系人口構成—1987/1988—
- 表2-9 都市・農村部別男女別日系人口構成—1987/1988—
- 表2-10 都市・農村部別人口構成—ブラジルとの比較
- 表2-11 年齢別ブラジル生れ日系人口の出生地—都市・農村—

2-c 性比・年齢別人口

- 表2-12 30歳年齢層別男女別日系人口構成—1987/1988—
- 表2-13 15歳年齢層別男女別日系人口構成—1987/1988—
- 表2-14 15歳年齢層別男女別人口構成比—1988—
- 表2-15 15歳年齢層別男女別人口構成比—ブラジル1986—
- 表2-16 年齢層別男女人口構成—1958—

2-d 日系度別人口

- 表2-17 個人日系度別男女別都市・農村別人口構成比—1988—

2-e 世代別人口

- 表2-18 大分類世代別人口構成比—1988—
- 表2-19 小分類世代別人口構成比—1988—
- 表2-20 世代別混血状況
- 表2-21 小分類世代別男女別都市・農村別人口構成比—1988—

2-f 配偶関係別人口

- 表2-22 配偶関係別男女別都市・農村別日系人口構成比—1988—
- 表2-23 配偶関係別人口比の比較—ブラジルと日系人口

2. 人口

2-a 人口の地域的分布

1987年7月調査時現在の、ブラジル在住日系人口は総数1,228,000人(±3,000人)と推計された。ここでいう「日系人」とは日本人移民及び日本人長期滞在者とその子孫を指し、こうした日本人の一人を祖先に持つブラジル在住の者は全て含まれている。ブラジルへの日本人移住は1908年に開始され、本調査の時点に於いて、すでに79年が経過しているが、自己の祖先(ここでいう祖先とは直系の祖先である)に日本人がいたかどうかはまだ明確に確認されていると予想された。そこで本調査では、調査員に調査地域内全人口に、「祖先に日本人がいたか」、いたとすれば、誰が一ということ(調査員が持参した系譜(6. 調査票及び関連書類の章を参照のこと)のどの個人が一人日本人だったかを質問させた。大多数の被調査対象者がこの質問に明確に回答した。こうした調査の結果、推定されたのが上記の推定値であり世代別人口等の推定値である。また、「日系人」の概念に関連して、「日系世帯」の考え方に触れれば、本調査では日系世帯を上記のような日系人を一人でも含む世帯と規定したこの規定ではどんなに世帯員数が多くとも一人でも日系人が同居していれば日系世帯とし我々のサンプルとして調査を実施した。従って、こうした日系世帯に含まれる全人口数は日系人口数を上回っている。1987年調査時に於いて、この人口数は1,479,000人を数え、日系世帯内には約251,000人の非日系人口が同居していることになる。しかし、本報告はあくまでも日系人口を対象として、現在に於ける日系人口の特質の一端に接近することを目指しており、必要のないかぎり、非日系人に関しては記述を行わない。

さて、IBGEのブラジル推定人口(populacao residente projetada)によれば、1987年度のブラジル総人口は141,452,187人である。従って、同年に於ける日系人口のブラジル総人口に占める割合は0.868%ということになる。この人口が現在ではブラジルのあらゆる地域に居住している。日系人口の地域的分布を示してみよう。表2-1, 2-3, 2-5は地域別日系人口の分布を示したものである。これらはいずれも5大地域を基礎としているが、東南部(sudeste)地域には日系人口が集中的に居住しているので、表2-3, 2-5ではさらに当該地域がサンパウロ市(MUNICIPIO DE SAO PAULO)、グランデ・サンパウロ(ここではサンパウロ市は除外される)サンパウロ州(ここではサンパウロ市とグランデ・サンパウロは除外される)、及びサンパウロ州外の諸州—リオ・デ・ジャネイロ、エスピリト・サント、ミナス・ジェライス州—toに細分化されている。

これらの表から、日系人口の居住していない地域はなく、あらゆる地域に散在していることが了解される。しかしながら、その分布は決して一様ではない。日系人口の79.4%は東南部に集中する。しかもその大部分、日系人口の72.23%はサンパウロ州に居住している。さらにサンパウロ州のなかではサンパウロ市に総人口の26.5%が集中している。東南部地域以

外では南部に人口の11.69%が居住している。この人口の大部分はパラナ州に集中している。また、日系人口の他地域での分布は中西部（CENTRO-OESTE）（3.98%）、北部（NORTE）（2.68%）、東北部（NORDESTE）（2.32%）となっている。最も日系人口の分布が少ない東北部地域で、日系人口数は28,000人である。また、この人口分布を1958年当時（移民50年祭時『ブラジルの日系人調査』—これ以外に比較すべき、調査・統計資料はない。以下、1958年とはこの調査を指すものとする）と比較してみると（表2-7参照）、この30年間で人口数は約3倍となり、同様な地域的な変遷を示しながらも、より広範な地域への広がりを看取することができよう。

表2-1 5大地域別男女別人口構成

地域区分	男	女	性別不詳	合計
NORTE	18,000	15,000	-	33,000
NORDESTE	11,000	17,000	-	28,000
SUDESTE	496,000	472,000	6,000	974,000
SUL	72,000	71,000	1,000	143,000
CENTRO-OESTE	28,000	19,000	2,000	49,000
合計	625,000	595,000	8,000	1,228,000

表2-2 5大地域別男女別人口構成の誤差限界表

地域区分	男	女	性別不詳	合計
NORTE	7,000	4,000	-	11,000
NORDESTE	23,000	34,000	-	57,000
SUDESTE	42,000	46,000	-	89,000
SUL	18,000	30,000	-	49,000
CENTRO-OESTE	9,000	3,000	4,000	8,000
合計	18,000	11,000	4,000	3,000

表 2 - 3 地域別男女別人口構成

地域	男	女	性別不詳	合計
NORTE	18.000	15.000	-	33.000
NORDESTE	11.000	17.000	-	28.000
CIDADE DE S. PAULO	163.000	159.000	4.000	326.000
GRANDE S. PAULO	90.000	78.000	2.000	170.000
ESTADO DE S. PAULO	204.000	187.000	-	391.000
RJ ES MG	39.000	48.000	1.000	87.000
SUL	72.000	71.000	1.000	143.000
CENTRO-OESTE	28.000	19.000	2.000	49.000
合計	625.000	595.000	8.000	1.228.000

Obs.: Grande São Paulo [Excluída a Cidade de São Paulo]
 Estado de São Paulo [Excluídas Grande São Paulo e
 Cidade de São Paulo]

表 2 - 4 地域別男女別人口構成の誤差限界表

地域	男	女	性別不詳	合計
NORTE	7.000	4.000	-	12.000
NORDESTE	23.000	34.000	-	57.000
CIDADE DE S. PAULO	38.000	54.000	1.000	91.000
GRANDE S. PAULO	11.000	9.000		21.000
ESTADO DE S. PAULO	21.000	25.000	1.000	45.000
RJ ES MG	49.000	65.000		114.000
SUL	18.000	30.000		49.000
CENTRO-OESTE	9.000	3.000	4.000	8.000
合計	18.000	11.000	4.000	3.000

表 2 - 5 地域別男女別人口構成

(1987)

地域	男	女	性別不詳	合計
NORTE	1,44	1,24	-	2,68
NORDESTE	0,93	1,39	-	2,32
CIDADE DE S. PAULO	13,25	12,96	0,34	26,55
GRANDE S. PAULO	7,34	6,37	0,13	13,84
ESTADO DE S. PAULO	16,58	15,23	0,03	31,84
RJ ES MG	3,21	3,91	-	7,12
SUL	5,83	5,82	0,04	11,69
CENTRO-OESTE	2,32	1,51	0,15	3,98
合計	50,9	48,43	0,69	100,02

表 2 - 6 地域別日系世帯数

地域	单身	夫婦	直系	傍系	非親族	不詳	合計
NORTE	1.000	4.000	2.000	-	4.000	-	11.000
NORDESTE	-	6.000	-	-	-	-	6.000
CIDADE DE S. PAULO	6.000	70.000	14.000	4.000	3.000	-	96.000
GRANDE S. PAULO	-	40.000	5.000	2.000	-	-	47.000
ESTADO DE S. PAULO	8.000	77.000	17.000	5.000	9.000	3.000	119.000
RJ ES MG	-	18.000	5.000	-	2.000	-	26.000
SUL	2.000	25.000	7.000	1.000	1.000	-	36.000
CENTRO-OESTE	1.000	13.000	-	-	1.000	-	14.000
合計	17.000	252.000	51.000	12.000	20.000	3.000	355.000

表 2-7 1958年の人口分布

地域	%	人口数
NORTE	1,21	5,227
SUDESTE		
ESTADO DE S. PAULO	75,68	325.520
RJ	1,35	5.803
MG	0,67	2.878
SUL		
PR	18,10	78.097
CENTRO-OESTE		
MT	2,06	8.886
GO	0,42	1.793
OUTRA REGIÃO	0,41	1.765
SEM INFORMAÇÃO	0,00	166
合計	100,00	430.135

2-b 都市・農村別日系人口の分布

ここでは都市・農村別に日系人口の分布をみることにしよう。その前に本報告書で採用する都市・農村の区分に関して触れておくことにしよう。我々の調査地域はIBGEが国勢調査等を実施する際に、各ムニシピオを地理的に約1,000人が含まれるような地域に便宜的に区分されたセトル(SETOR)を、さらに地理的にいくつかのサブセトル(sub-SETOR)に区分した地域である。IBGEは各セトルが位置する地域を4つの範疇に分けている。即ち、VILA OU CIDADE, URBANA, ISDLADA, AGLOMERADO RURAL, RURALである。そして前2者を都市部、後2者を農村部としている。従って、我々の調査地域も上記4範疇のいずれかに分類され、しかも都市部・農村部という範疇に区分することが可能である。即ち、我々の都市・農村の区分はIBGEの規定に基づいているわけである。

表2-8, 2-9はこの基準にそって日系人口の都市・農村別分布を示したものである。

これによれば、日系人口の内、89.89%に相当する1,104,000人が都市部居住者であり、一方農村部居住人口は全体の10.11%、124,000人であった。1988年の調査時においても、都市・農村部居住の比率に大きな差異は存在していない。また、日系人口の都市・農村部別分布状況をブラジル全体と比較したものが表2-10である。これによれば、1980年センサス時のブラジル全体の都市部居住人口の比率は67.59%であり、一方農村部は32.41%となっており、日系人口の都市居住ははるかにブラジル全体をうわまわっている。さらに、この人口分布を1958年の調査結果と比較してみよう。但し、この比較にはある制限が伴う。即ち、1958年時点の都市・農村区分の基準が我々のものとは異なっているのである。1958年にとられた基準は「ムニシピオ当局によって街路に名称づけられている地域を市街地、しからざるところを農村」とするものである。こうした制限を認めた上で、この30年間に於ける日系人口の居住地の変化を追ってみよう。1958年の調査結果によれば、当時、市街地居住人口44.9%、農村居住人口55.1%であった。当時に於いては農村人口が都市部人口を上回っていたのである。しかし、この比率をブラジル全体と比較すると、この分布率は当時のブラジル全体の比率に相応している。従って、この30年間の日系人口の都市移動乃至都市化はブラジル全体のスピードをはるかに上回る形で進行してきたといえるであろう。表2-11はブラジル生れの日系人口をその出生地が都市部であったか、農村部であったかを15歳年齢層別に示したものである。これによれば、30～45歳の年齢層を境に都市部出生者の比率が農村部出生者を上回っていることが了解され、上述の傾向を裏付けている。

表2-8 都市・農村部別日系人口構成—1987/1988—

都市・農村	1987		1988	
	都市	1,104,000	89,89%	1,152,000
農村	124,000	10,11%	128,000	10,01%
不詳	-	-	1,000	0,06%
合計	1,228,000	100,0%	1,280,000	99,95%

表2-9 都市・農村別男女別日系人口構成—1987—

都市・農村	男	女	性別不詳	合計
都市	554,000 (45,16%)	541,000 (41,05%)	8,000 (0,68%)	1,104,000 (89,89%)
農村	70,000 (5,72%)	54,000 (4,38%)	- (0,01%)	124,000 (10,11%)
合計	625,000 (50,88%)	595,000 (48,43%)	8,000 (0,69%)	1,280,000 (100,0%)

表2-10 都市・農村別人口構成比—ブラジルとの比較—

都市・農村	ブラジル	日系
都市	67,8 %	89,9 %
農村	32,2 %	10,0 %
合計	100,0 %	99,9 %

表2-11 年齢別ブラジル生れ日系人口の出生地—都市・農村—

出生地						(%)	
	00-15	15-30	30-45	45-60	60-	S/Inf.	合計
ブラジル農村	4,37	24,09	35,11	29,45	6,64	0,34	100,00
ブラジル都市	23,30	45,83	21,98	8,04	0,63	0,22	100,00
ブラジル全体	14,19	35,29	28,41	18,28	3,57	0,29	100,03

2-c 年齢別日系人口

1987年調査時に於いて、ブラジルの全日系人口の男女別構成をみると、男は625,000人、女は595,000人（性別不詳8,000）と推計され、その男女間の比率は50.88%:48.43%と若干ながら男の比率が女を上回っている。表2-12, 2-13, 2-14はそれぞれ30歳乃至15歳別男女別人口構成を示したものである。30歳別ではいずれの年齢階層においても男の人口が女の人口を上回っている。しかし15歳別をみると、15歳未満の年齢階層で若干ながら女の比率が男を上回っているのが了解される。表2-15はブラジル全体の男女別15歳年齢別人口構成比を示したものである。全体的にみると、1986年では男50.88%、女49.22%であって男の比率が女を上回り、日系人口の構成と同様の傾向を持つといえよう。また、1958年当時の傾向も男の比率が女を上回り、年齢階別にみてもおおきな差異は認められない。（表2-16）

また、15歳別人口構成をブラジル全体と日系で比較してみると、30歳までの幼・青年層ではブラジルの比率が日系を上回り、逆に30歳以上の壮・老年層では日系人口の比率がブラジル全体を上回っている（表2-14, 2-15）。従って、人口ピラミッドを描けば、日系のほうがつりがね型に近い構成となっているといえよう。

表2-12 30歳年齢層別男女別日系人口構成—1987/1988—

年齢層	男		女		性別不詳		合計	
	1987	1988	1987	1988	1987	1988	1987	1988
00-30	346.000	347.000	332.000	347.000	3.000	3.000	681.000	699.000
31-60	217.000	231.000	204.000	210.000	2.000	1.000	423.000	443.000
61-	55.000	62.000	53.000	62.000	1.000	1.000	109.000	125.000
Sem Inf.	7.000	4.000	5.000	7.000	2.000	2.000	15.000	13.000
合計	625.000	645.000	595.000	626.000	8.000	8.000	1228.000	1280.000

表 2-13 男女別15歳年齢別日系人口構成

年齢層	男		女		性別不詳		合計	
	1987	1988	1987	1988	1987	1988	1987	1988
00-15	202,000	193,000	207,000	210,000	2,000	2,000	411,000	406,000
16-30	144,000	154,000	125,000	137,000	1,000	1,000	270,000	292,000
31-45	126,000	130,000	115,000	118,000	1,000	1,000	242,000	250,000
46-60	90,000	101,000	90,000	92,000	1,000	1,000	181,000	194,000
61-	55,000	62,000	53,000	62,000	1,000	1,000	107,000	125,000
Sem Inf.	7,000	4,000	5,000	7,000	2,000	2,000	15,000	13,000
合計	625,000	646,000	595,000	626,000	8,000	9,000	1228,000	1280,000

表 2-14 15歳別男女別人口構成比

年齢層	男	女	性別不詳 (Sexo)	合計 (%)
00-15	29,95	33,61		31,54
16-30	23,84	21,87		22,71
31-45	20,16	18,88	0,68	19,40
46-60	15,72	14,73		15,13
61-	9,65	9,84		9,68
Sem Inf. Idade	0,68	1,07		0,86
合計	51,04	48,89	0,01	100,00 (*)

*この数値には性別不詳の0.68%が含まれている。

表 2-15 15歳年齢層別男女別人口構成比—ブラジル1986—

年齢	男	女	合計 (%)
00-14	37,14	35,38	36,25
15-29	27,78	27,71	27,74
30-44	17,83	18,53	18,19
45-59	10,73	11,10	10,92
60-	6,51	7,27	6,90

表 2-16 年齢別男女別人口構成比—1958—

年齢層	男	女	合計 (%)
00-14	39,7	41,4	40,5
15-59	54,8	53,4	54,1
60-	5,5	5,2	5,4

2-d 個人日系度別人口

ここでは「個人日系度」という新しい考え方を使得って日系人口構成をみてみよう。我々が使う「個人日系度」という概念は日本人を1、非日本人を0とし、父と母がもつ上位世代からの日系度の平均を個人の日系度としたものである。換言すれば、日系度1の日系人間の婚姻が継続する限り、その婚姻から誕生した子は常に1という日系度をもつ訳である。従って、この日系度は混血の度合いの一面をとられるための考え方である。

たとえば、日本人(乃至純日系人)の父(1)と非日本(系)人の母(0)から生れた子の日系度は $(1+0) \div 2 = 1/2$ となる。尚、この概念はなんら文化的意味はふくまれない。表2-17は上記のような算定法で日系人口を区分し、それを男女別、都市・農村別に示したものである。先ず、全体的傾向をみると、日系人口の71.58%は混血していない、即ち、日系度1であり、一方何らかの程度で混血している日系人口は27.34%である。また、混血日

系人についてみると、その殆どが日系度 $1/2$ 以上のものである。 $1/2$ 以下の混血日系人は 4% 以下である。

次に男女別にみると、男女はほぼ同様な傾向性をもつが、女子の方の混血の比率が男子を若干上回っていることがわかる。さらに都市・農村別にみると、農村部の混血の割合は都市部より 10% 程度低くなっている。

表 2-17 個人日系度別人口構成比

日系度	男	女	都市部	農村部	合計 (%)
1	73,22	70,03	70,62	80,42	71,58
$1/2 \rightarrow 1$	22,09	24,90	24,33	16,67	23,60
$1/4 \rightarrow 1/2$	2,06	2,04	2,09	1,51	2,03
$\rightarrow 1/4$	1,86	1,61	1,80	1,00	1,71
不明	0,79	1,41	1,15	0,40	1,08

2-e 世代別人口

ここでは世代別に日系人口の構成をみることにしよう。まず、ここで使用される「世代」の数え方に関して述べよう。日本人移住者は 1 世であり、1 世同士の夫婦から生まれた日系人は 2 世、2 世同士の夫婦から誕生した日系人は 3 世である。世代を異にした夫婦から誕生した日系人はより新しい世代 + 1 をその個人の世代とする。例えば、1 世と 2 世の夫婦から生まれた子は 3 世である。また、混血日系人が多く存在しているという事実と関連した、5 世を除く各世代では「純」と「混」というサブ・カテゴリーを設定した。例えば、1 世と非日系人から生まれた子は 2 世混となるし、2 世純の日系人と非日系人から生れた子は 3 世混となる。この概念は自己をどのように認識しているかに係る EDENTITY の範・ではなく、あくまで系譜上の客観的事実からとらえられたものであり、文化的背景の共通性とは関連を有していない。

表 2-18, 2-19, 2-21 は日系人口の世代別構成を上述の基準からみたものである。これによれば調査時において、1 世は日系総人口の 12.51% を占めるに過ぎない。また 2 世は 30.85% であり、3 世が日系人口の中で最も多く 41.33% を占めている。また 5 世も少ないながら存在する。世代別人口を男女別にみると、男女間では明確な差異は存在していない。また都市・農村別にみると、相対的に見て農村のほうが 1 世の比率が高い。また年齢層別にみると 2 世層はあらゆる年齢階層に分散しているが、3 世では 30 歳未満の層—特に 15 歳未満の層に集中し、この傾向は 4 世では更に強まる。また 5 世では 15 歳未満の層にのみ出現する表 2-20 は世代別混血状況をみたものである。これによれば、世代が下がるに連れて混血日系人の割合が増加していく傾向が認められる。各世代に於ける混血状況を

混血が世代人口に占める割合からとらえると、2世では6.03%であるものが、3世では42%へ、そして4世になると6割へと上昇する。こうした混血化を男女別にみると、女子の混血が若干男子を上回り、都市・農村別にみると、相対的に農村部の混血化の割合が低いといえよう。

表2-18 大分類世代別人口構成比—1988—

世代	%
1世	12,51
2世	30,85
3世	41,33
4世	12,95
5世以上	0,28
不明	2,07

表2-19 小分類世代別人口構成比—1988—

世代	%
1世	12,51
2世純	28,99
2世混	1,86
3世純	23,96
3世混	17,36
4世純	4,97
4世混	7,98
5世以上	0,28
不明	2,07

表2-20 世代別混血状況

世代	混血率*
2世	6,03%
3世	42,00%
4世	61,62%

*混血率 = 混血世代人口 ÷ その世代総人口 × 100

表2-21 小分類世代別男女別都市・農村別人口構成比 - 1988 -

世代	男	女	都市部	農村部	合計 (%)
1世	14,16	10,84	11,88	18,47	12,51
2世純	28,24	29,98	29,39	25,50	28,99
2世混血	1,23	2,52	1,89	1,31	1,86
3世純	24,22	23,72	23,24	30,62	23,96
3世混血	17,53	16,95	18,34	8,53	17,36
4世純	4,92	4,93	5,17	3,21	4,97
4世混血	7,40	8,59	7,73	10,14	7,98
5世以上	0,24	0,33	0,26	0,40	0,28
不明	2,06	2,14	2,10	1,81	2,07

2-f 配偶関係別人口

ここでは配偶関係という観点から、日系人口の構成をみることにしよう。我々が個人を配偶関係という観点から分類するためにもちいた範疇は既婚 (CASADAS)、未婚 (独身) (SOLTEIRAS)、離・死別の3つである。前2者はIBGEがCENSO DEMOGRAFICOで用いた規定をそのまま踏襲している*離・死別の範疇はIBGEがさらにSEPARADAS, DESQUITADAS, DIVORCIADAS, VIUVASと4範疇に細分しているものを1つの範疇に統合したものである。

さて、上記の範疇に日系人口を分類し、男女別、都市・農村別に示したものが表2-22

である。これによれば日系人口では男女とも55%程度が未婚=独身であり、既婚の比率は男子で41%程度、女子で38%程である。また、離・死別は全体で4.49%であるが、男女別にみると女子の比率が男子の3倍程度多くなっている。都市・農村別にみると配偶関係には大きな差異は存在していない。表2-23は日系人口の配偶関係別人口比をブラジル全体と比較したものである。これによれば、日系人口では未婚=独身の比率がブラジル全体よりも20%以上高く、逆に既婚は17%程度低くなっていることが了解される。こうした差異がどのような要因によるかは現在のところ不明である。

*分類区分に関しては、用語の解説の項を参照のこと。

表2-22 都市・農村別男女別婚姻上の地位別日系人口の比率

Estado Marital	男	女	都市	農村	合計 (%)
既婚(有配偶)	41,27	38,16	39,67	39,82	39,67
未婚	55,95	55,45	55,53	55,77	55,53
離・死別	2,64	6,30	4,51	4,31	4,49
不詳	0,14	0,08	0,29	0,10	0,27

- (1) 全体的にみると、日系人口では既婚39.67%、未婚55.53%、離死別4.49%となっている。
- (2) 男女別・都市農村別にみても、全体的傾向性に顕著な差異は存在していない。若干の傾向性として、既婚者では男子のほうがやや高く、離・死別では女性の割合が高いといえよう。

Estado Marital	Brasil	Descend. Japoneses
Solteiro	34,19 %	55,9 %
Casado	56,06 %	39,1 %
Viuvo/Separado	7,38 %	4,3 %

上記の表はブラジル全体と日系人口を配偶関係から比較したものである。これによれば日系人口のSOLTEIROSの割合はブラジル全体と比較すると20%以上も高く、逆にCASADOSの割合は17%程度低くなっている。

図 表

3. 経済的側面

3-a 就業状況—活動内容

表 3-1 主な活動内容別男女別人口

表 3-2 主な活動内容別都市・農村別人口

3-b 職業別人口構成

表 3-3 職業別男女別人口構成比—1988—

表 3-4 職業別人口構成比の比較—ブラジル(1987)と日系(1988)—

表 3-5 職業別都市・農村別人口構成比—1988—

表 3-6 職業別人口構成比の比較—1958/1988—

3-c 職業上の地位別人口構成

表 3-7 職業上の地位別男女別都市・農村別人口構成比—1988—

表 3-8 職業上の地位別人口構成比—ブラジル(1987)と日系—

表 3-9 職業上の地位別人口構成比—1958/1988—

3-d 産業別人口構成

表 3-10 小分類産業別人口構成比の比較—ブラジル(1987)と日系(1988)

表 3-11 小分類産業別男女別都市・農村別人口構成比—1988—

表 3-12 大分類(第1次、2次、3次)産業別人口構成比—1988—

表 3-13 大分類産業別人口構成比の比較—1958/1988—

3-e 収入のある仕事の数別人口構成

表 3-14 収入のある仕事の数別男女別都市・農村別人口構成比—1988—

3-f 経済階層別—世帯総収入別—世帯数

表 3-15 世帯総収入別都市・農村別世帯数の比率—1987—

表 3-16 世帯総収入別世帯数の割合の比較—ブラジル(1986)と日系(1987)

3-g 農村不動産の所有状況

表 3-17 農村不動産所有有無別都市・農村別世帯数の割合—1988—

表 3-18 農村不動産所有面積別都市・農村別世帯数の割合—1988—

3-h 居住状況

表 3-19 居住地域別日系人口の割合—1988—

表 3-20 電化の有無別都市・農村別世帯数の割合—1987—

表 3-21 ABASTECIMINIOS DE AGUA 形態別都市・農村別世帯数の割合

- 表 3 - 2 2 ABASTECIMINIOS DE AGUA 形態別都市・農村別世帯数の割合の比較 - ブラジル (1 9 8 6) と日系人 (1 9 8 7) -
- 表 3 - 2 3 居住家屋タイプ別都市・農村別世帯数の割合 - 1 9 8 8 -
- 表 3 - 2 4 居住家屋タイプ別都市・農村別世帯数の割合の比較 - ブラジル (1 9 8 6) と日系 (1 9 8 8) -
- 表 3 - 2 5 寝室の数別都市・農村別世帯数の割合 - 1 9 8 8 -
- 表 3 - 2 6 寝室の数別都市・農村別世帯数の割合の比較 - ブラジル (1 9 8 0) と日系 (1 9 8 8) -
- 表 3 - 2 7 居住家屋の居住年数別都市・農村別世帯数の割合 - 1 9 8 8 -
- 表 3 - 2 8 居住家屋の居住年数別都市・農村別世帯数の割合 (ブラジル全体 - 1 9 8 0 -)
- 表 3 - 2 9 家屋の所有関係別都市・農村別世帯数の割合 - 1 9 8 8 -
- 表 3 - 3 0 家屋の所有関係別都市・農村別世帯数の割合 (ブラジル全体 - 1 9 8 6 -)
- 表 3 - 3 1 家屋の所有関係別都市・農村別世帯数の割合の比較 - 1 9 5 8 / 1 9 8 8 -
- 表 3 - 3 2 MUNICIPIO 居住年数別都市・農村別世帯数の割合 - 1 9 8 8 -

3. 経済的側面

3-a 主な活動内容

10歳以上の日系人口を対象に主な日常的活動の内容を調査した。ここでは日常的活動として仕事、家事、勉強、求職、その他に区分している。「その他」の範疇には社会的活動、宗教活動、スポーツ、ボランティア活動、軍務等が含まれている。表3-1は主な活動別男女別人口をみたものである。これによれば、10歳以上の日系男子では66.5%程が仕事を、続いて20.9%程が勉強を日常的な主な活動としている。一方、女子では40.68%程が家事を、34.9%程が仕事を、そして21.1%程が勉強を主な活動としている。男女間に勉強を主な活動内容とする人口の比率には大きな差は見られないが、仕事—家事という活動は男女間の役割分担として明確な差が認められる。女子の34.9%程が仕事を日常的な主要活動としていることは、日系人口の独身の比率が高いことや女子における離・死別の高率と相関する可能性が高いといえよう。勉強を日常的な主要活動とする比率が20%強という数値は年齢別人口構成とはほぼ対応している。

表3-2は主な活動別都市・農村別人口構成を示したものであるが、この両者には同様な傾向が看取される。強いて両者の差異を述べれば、農村部に於いては家事を日常的な主要活動としている者の比率が都市を上回っていることである。この点に都市—農村の夫婦の役割分担の違いが存在する可能性があるが、現時点では明らかではない。

表3-1 男女別活動内容

主な活動内容	男	女 (%)
仕事	66,53	34,87
家事	0,25	40,68
勉強	20,87	21,09
求職中	2,22	0,64
その他	10,02	2,63
合計	99,99	99,91

表3-2 都市農村別活動内容

主な活動内容	都市	農村 (%)
仕事	51,53	49,84
家事	19,38	24,28
勉強	21,13	21,35
求職中	1,58	0,12
その他	6,61	4,96
合計	100,23	100,43

3-b 職業別人口

10歳以上の日系人口のうち、仕事を日常的活動としている者について、その職業別人口構成をみてみよう。ここで用いる分類はIBGPP*が1980年のセンサスで利用した分類基準である。その範疇は専門・技術、管理・事務、農牧畜水産、製造・加工・土木・建築、商業・販売、運輸・通信、サービス、その他の8範疇である。それぞれの範疇に関する規定の詳細はここでは触れない。

表3-3は日系人口を職業別男女別に示したものである。これによれば、男子では管理・事務が最も多く25.58%、続いて商業・販売従事者が20.84%である。以下、農牧畜水産(15.36%)、専門・技術(12.17%)と続く。一方、女子では男子と同様に管理・事務が最も多い(31.99%)が、続いては専門・技術(21.59%)、商業・販売従事者(21.59%)、商業・販売従事者(21.13%)の順となっている。また女子ではサービスも14.37%見られる。男女を比較してみると、女子では専門・技術、管理・事務、サービスに於いて男子の比率を上回り、一方、男子では農牧畜水産、製造・加工・土木・建築、運輸・通信で女子の比率を上回っている。

表3-4は日系人口をブラジル全体と比較したものである。これによれば、日系では専門・技術(15.49%:7.14%)、管理・事務(27.84%:13.65%)、商業・販売(20.94%:9.81%)がブラジル全体を上回っているが、他方、農牧畜水産(11.75%:23.65%)、製造・加工・土木・建築(9.38%:20.42%)でブラジル全体の比率を下回っている。

次に都市・農村部別人口構成をみると(表3-5)、都市部では管理・事務が30.14%と

最も多く、次いで商業・販売従事者（22.75%）、専門・技術（17.09%）の順になっている。一方、農村部では圧倒的に農牧畜水産の比率が高く、全体の72.96%を占めている。

表3-6は、今回の調査結果を1958年と比較したものである。この表中には農業従事者は含まれていないが、1958年当時、農業従事者の就業人口に占める割合は55.9%であった。一方、1988年に於ける比率は農牧畜水産を全て含めても僅かに11.75%であり、この30年間に於いて日系人口の農業従事者は激減したといえよう。また、この表から非農業部門の職業構成の変化をみると、1988年では管理・事務と運輸・通信の割合がそれぞれ1958年の3倍、4倍に増加し、専門・技術の割合も2倍になっている。一方、製造・加工・土木・建築、販売の割合はそれぞれ約1/7、1/4に減少している。サービス職の割合はこの30年間でほとんど変化がない。

表3-3 職業別男女別人口構成比

職業	男	女	全体 (%)
専門・技術	12,17	21,59	15,49
管理・事務	25,58	31,99	27,84
農牧畜水産	15,36	5,14	11,75
製造・加工・土木 建築	11,71	5,14	9,38
商業・販売	20,84	21,13	20,94
運輸・通信	5,02	0,52	3,43
サービス	7,86	14,37	10,15
その他	1,45	0,13	0,98

表3-4 職業別人口構成比の比較—ブラジル(1987)と日系—

職業	ブラジル	日系	(%)
専門・技術	7,15	15,49	
管理・事務	13,65	27,84	
農牧畜水産	23,65	11,75	
製造・加工・土木	20,42	9,38	
建築			
商業・販売	9,81	20,94	
運輸・通信	3,93	3,43	
サービス	10,32	10,15	
その他	11,69	0,98	

表3-5 職業別都市・農村別人口構成比—1988—

職業	都市	農村	全体 (%)
専門・技術	17,09	3,35	15,49
管理・事務	30,14	9,43	27,84
農牧畜水産	4,22	72,96	11,75
製造・加工・土木	10,24	2,31	9,38
建築			
商業・販売	22,75	5,66	20,94
運輸・通信	3,76	0,63	3,43
サービス	10,93	3,98	10,15
その他	0,87	1,68	0,98

表3-6 職業別人口構成比の比較—1958・1988—

職業	1958	1988 (%)
専門・技術	8,1	15,49
管理・事務*	9,6	27,84
農牧畜水産	55,9	11,75]
製造・加工・土木 建築**	28,0	9,38 (**)
商業・販売	36,3	20,94
運輸・通信	5,0	3,43
サービス	12,1	10,15
その他	0,9	0,98

3-0 職業上の地位別人口

ここでは10歳以上の日系就業人口を職業上の地位別にみることにしよう。ここでの分類基準もブラジル全体との比較を考慮して、IBGEが1980年のセンサスで用いた基準を使用している。即ち、被雇用者、自営、経営主、家族従業員（NAO RFMUNI RADA）である。

表3-7は職業上の地位別・男女別・都市／農村別に日系就業人口をみたものである。これによれば、男子では46.12%が被雇用者として職業に従事している。また経営主も24.32%みられる。女子では男子に比して被雇用者の割合が増え（56.92%）、経営主の比率が男子の1/4程度に低下し、逆に家族従業員の比率が男子の約2倍になっている。自営では男女間に大きな差異は認められない。都市・農村別にみると、都市部では被雇用者が54.25%と断然多く、続いて経営主と自営が17%台できっこうする。一方、農村部では被雇用者は極端に減り、代わって家族従業員、自営がそれぞれ39.96%、23.64%へと増加する。

こうした日系人口の特徴をブラジル全体と比較したのが表3-8である。これによれば、日

* 1958年ではこの範疇は管理的と事務職に区分されていたが、ここでは合せた。

** この範疇は技能工と名付けられている。必ずしも同一範疇ではないが、比較はある程度可能であろう。

系では経営主と家族従業員の割合がブラジル全体を上回り、逆に被雇用者はブラジル全体を下回っている。自営では大きな差異は見られないものの日系が全体をやや下回っている。さらに、1958年と比較してみよう。(表3-9)1958年における分類は被雇用者、自営、経営主、家族従業員、管理的という5つの範疇を用いている。ここでは比較を行うために、便宜的に管理的という範疇を、経営主に含めてある。つまり、管理的地位の持つ経営権への参加の可能性を考慮したものである。1958年と88年を比較すると、被雇用者の比率がこの30年間で約15%、また経営主も6%程度増加している。一方、自営は31.7%から18%へ、家族従業員は21.0%から12.91%へと減少している。従って、この間の変化を家族従業員による自営形態の減少とサラリーマン化という2つの傾向性からとらえることも可能であろう。

表3-7 職業上の地位別男女別都市・農村部人口構成比-1988-

職業上の地位	ブラジル (1987)	日系人			
		男	女	都市	農村
被雇用者	66,05	46,12	56,92	54,25	15,27
自営	22,58	18,91	17,01	17,56	23,64
経営主	3,47	24,32	6,60	17,82	19,87
家族従業員	7,90	9,84	18,56	9,58	39,96
その他	-	0,81	0,91	0,79	1,26

表3-7は10歳以上の日系人口のうち、仕事をもっている者に付き、職業上の地位別にみたものである。これによれば、男子では46.12%が雇用者として労働に従事している。また経営主も24.32%みられる。女子では雇用者の割合が増え(56.92%)、経営主の比率が男子の1/4程度に低下し、更に家族従業員として働く割合が18.56%と男子の約2倍となっている。自営では男女間に大きな比率の差はみられない。これをブラジル全体と比較してみると日系人口では経営主と家族従業員形態の比率がブラジルの平均をうまわり、一方雇用者は平均よりも低い。また、自営業では余り大きな差異は見られないものの日系が若干平均を下回っている。

都市・農村別にみると、都市部では雇用者が54.25%と断然多く、続いて経営主と自営が17%台できっこうする。また、農村部では雇用者は極端に減少し、代わって家族従業員、自営がそれぞれ39.96%、23.64%へと増加する。

表3-8 職業上の地位別人口構成比—ブラジル(1987)と日系人(1988)—

職業上の地位	ブラジル	日系人
被雇用者	66,05	49,92
自営	22,58	18,24
経営主	3,47	18,08
家族従業員*	7,9	12,91
その他	-	0,84

ブラジルの統計では nao remunerados となっている。

表3-9 職業上の地位別人口構成比—日系人(1958)と日系人(1988)—

職業上の地位	日系人 1958	日系人 1988	(%)
被雇用者	35,5	49,92	
自営	31,7	18,24	
経営主*	11,8	18,08	
家族従業員	21,0	12,91	
その他	-	0,84	

* 日系人(1958)では「管理的」という範疇が存在しているが、ここでは経営主に含めてある。

3-d 産業別人口

10歳以上の日系就業人口を産業別にみることにしよう。ここで用いる分類基準もIBGIの1980年センサス時の基準である。そこでは産業を農林牧水産漁業、製造・加工業、建築業、工業、商業、サービス業、企業関連サービス業、運輸・通信業、社会・福祉関係業、公務、その他という範疇に区分している。

表3-10は日系人口を上記の分類基準から示し、それをブラジル全体と比較したものである。まず日系からみれば、日系人口が従事する産業で最も多いのは商業であり、全体の25.82%を占める。これに続いては農林牧水産漁業15.44%、製造・加工業15.30%、サービス業13.91%が多い。逆に少ないのは工業0.3%、建築業2.33%である。

これを1987年のブラジル全体と比較してみると、日系がブラジル全体を上回るのは商業（BRASIL 11.59%：NIKKI 25.82%）、社会・福祉関連業（8.11%：10.22%）企業関連サービス業であり、逆に下回るのは農林牧水産漁業（1.544%：2.459%）、建築業、工業、サービス業等である。

次に産業別人口を男女別、都市・農村別にみてみよう。（表3-11）まず、男女別にみると、男女ともに商業が最も多くなっており、続いて男子では農林牧水産漁業、製造・加工業の順に、また女子では社会・福祉関連業、サービス業の順におおくなっている。つぎに都市・農村別にみると、都市では商業、製造・加工業、サービス業の順序が多いが、農村部では農林牧水産漁業が圧倒的に多数を占めている（80.79%）。

さらに産業別人口を第1次、第2次、第3次産業という大分類から示してみよう。表3-12は大分類別男女別都市・農村別人口をみたものである。これによれば、都市部では第3次産業従事者が66.18%と7割近くを占め、圧倒的に多い。一方、農村部では第1次産業に従事する人口が8割を占めている。男女別にみると、男子では第3次産業に従事する者が55.52%、そして第1次、第2次産業従事者がそれぞれ約2割ずつであるのに対し、女子では第3次産業従事者が74.48%と圧倒的に多く、逆に第1次産業従事者は5.10%と少ない。これらを1958年当時と比較してみよう（表3-13）まず全体的に見れば、この30年間で第1次産業従事者の割合は57.3%から15.44%へと大きく減少し、一方、第3次産業従事者の割合は35.0%から60.5%へと倍増している。第2次産業でも7.7%から18%へ増加している。都市・農村別に比較してみると、それ程大きな差異はみられない。強いて言えば、農村部では第1次産業従事者の割合が減少し、それが第2次、第3次産業へと分散されたといえよう。また男女別にみても、第1次産業従事者の割合は男女とも大きく減少しているが、この傾向は女子に於いて極端である。即ち、1958年当時では58.3%と過半数を占めていた第1次産業従事者は88年には僅かに5.10%と占めるに過ぎなくなってしまっている。この第1次産業従事者の減少は第2次第3次産業従事者の比率の増加となったが、特に第3次産業の増加が著しい。特に女子においては1958年には32.9%であった第3次産業従事者は88年には74.48%へと大きく増加しているのである。こうした産業別人口構成の変化は農業従事者の減少、それと関連する日系人口の都市移動、日系子弟の高学歴取得等の要因との相関が予想される。

表3-10 小分類産業別人口構成比の比較—ブラジル(1987)と日系(1988)—

産業	ブラジル (1987)	日系人 (1988)	8
農林牧水産漁業	24,59	15,44	
製造・加工業	15,69	15,30	
建築業	6,64	2,33	
工業	1,49	0,37	
商業	11,59	25,82	
サービス業	17,60	13,91	
企業関連サービス業	2,88	3,73	
運輸・通信業	3,76	3,68	
社会・福祉関係業	8,11	10,22	
公務	4,67	3,13	
その他	2,98	6,06	

表3-11 小分類産業別男女別都市・農村部別人口構成比—1988—

産業	男	女	都市	農村
農林牧水産漁業	21,10	5,10	7,38	80,79
製造・加工業	17,46	11,37	16,60	4,17
建築業	3,29	0,58	2,58	0,2
工業	0,46	0,19	0,35	0,00
商業	25,42	26,55	28,43	4,38
サービス業	11,05	19,12	14,99	5,01
企業関連サービス業	3,61	3,94	4,26	0,40
運輸・通信業	4,96	1,36	4,13	0,40
社会・福祉関係業	5,10	19,57	11,16	2,08
公務	2,69	3,94	3,21	2,29
その他	4,85	8,27	6,84	0,20

表3-12 大分類(第1次、第2次、第3次)産業別人口構成比—1988—

産業	都市	農村	男	女
第1次産業	7,38	80,79	21,10	5,10
第2次産業	19,53	4,37	21,21	12,14
第3次産業	66,18	14,56	55,52	74,48
不詳	6,84	0,20	4,85	8,27

表3-13 大分類産業別人口構成比の比較—1958/1988—

産業	都市		農村		男		女		合計	
	1958	1988	1958	1988	1958	1988	1958	1988	1958	1988
第1次産業	9,4	7,38	92,6	80,79	57,1	21,10	58,3	5,10	57,3	15,44
第2次産業	16,0	19,53	1,7	4,37	6,9	21,21	7,2	12,14	7,7	18,00
第3次産業	74,5	66,18	5,7	14,56	34,8	55,52	32,9	74,48	35,0	60,49

3-0 収入のある仕事の数別人口

表3-14は日系就業人口を収入のある仕事の数を指標に男女別、都市・農村別に示したものである。まず全般的な傾向から見れば、収入のある仕事の数が0という人口の割合が最も高く、37.51%となっている。次に多いのは収入源の数が1つというもので、この比率は収入源の数が0の者と殆ど差はなく、36.11%である。この事実は日系就業人口に於ける職業上の地位に於いて、家族従業員の比率が高いことと相関があるだろう。また、複数の収入源を持つ複数の仕事を持っているものは合せて2%程見られる。

次に男女別に見ると、男子と女子で収入のある仕事数が0と収入のある仕事数が1との比率がちょうど逆転している。即ち、男子では収入のある仕事数が0,1の比率はそれぞれ27%,47.3%であるのに対して、女子ではそれぞれ48.6%,24.7%となっている。このことは職業上の地位で家族従業員の比率が女子は男子の約2倍見られる事実と相関しているといえよう。また、収入のある仕事を複数もつ者の比率は男子では約3%程度、女子ではその比率が約1%である。

更に、これを都市・農村別に見ると、都市では収入のある仕事数が1の者の割合が37.07%と高く、続いて、収入のある仕事数が0の者が36.20%である。一方、農村では、収入のある仕事数が0の者の比率が最も高く(49.44%)、次に1の者につづく。このことは都市・農村

部の家族従業員の比率の差と関連していよう。収入のある仕事を複数持つ者の比率は都市・農村で大きな違いはない。

表 3-14 収入のある仕事の数

収入のある仕事の数	男	女	都市部	農村部	合計 (%)
0	27,00	48,60	36,20	49,44	37,51
1	47,27	24,65	37,07	27,58	36,11
2	2,57	0,81	1,66	2,00	1,70
3	0,01	-	0,10	-	0,09
4	0,37	0,08	0,25	-	0,23

上記の表は日系人口を収入のある仕事の数別に示したものである。

まず、全体的な傾向をみると、収入のある仕事の数が0という人口の比率が最も高く、37.51%となっている。次におおくみられるのは収入のある仕事が1つというもので、この比率は0のものと同程度で、36.11%である。このことは日系就業人口における職業上の地位において、家族従業員の比率が高いことと相関する。また、複数の収入をもつ、複数の仕事を持っている者もあわせて2%ほど存在している。

次に男女別にみても、男子と女子とで、収入のある仕事が0と収入のある仕事が1との比率がちょうど逆転している。即ち、男子では収入のある仕事が0, 1の比率はそれぞれ27.00%, 47.27%であるのに対し、女子ではそれぞれ48.60%, 24.65%である。このことは職業上の地位で家族従業員の比率が女子は男子の約2倍みられる事実と相関する。(9.84% : 18.56%) また、収入のある仕事を複数持つ者の比率は男子で約3%程度、女子ではその比率が約1%と1/3に減少する。

更に、これを都市・農村別にみると、都市部では収入のある仕事が1の割合が37.07%と最も高く、続いて、収入のある仕事0が36.20%である。一方、農村部では、収入のある仕事が0の比率が49.44%と最も高く、次に1の比率(27.58%)と続く。このことは都市・農村部の家族従業員の比率の差異と関連するといえよう。また、収入のある仕事を複数もつ者の割合は都市・農村部で大きな違いはない。

表3-15 都市・農村別経済階層別世帯数の比率

社会階層	都市	農村	合計
1 最低給料まで	3,29	9,55	3,26
1~5	22,93	21,94	19,85
5~10	23,44	26,87	20,47
10~20	18,21	14,78	15,49
20~30	10,12	1,49	8,16
30以上	8,88	12,84	7,93
不明	13,13	12,43	(*) 24,85

(*) Estão inclusas as unidades domésticas impossibilitadas de pesquisar

3-f 経済階層別世帯数—最低給料を基準として—

ここでは1988年7月調査時現在の最低給料を基準として、調査時の世帯総収入から日系世帯を階層化したものから、日系世帯の経済的状況をみてみよう。表3-15によれば、最低給料の5~10倍の収入を得ている日系世帯が最も多く、全体の20.47%を占め、つづいて1~5倍19.85%、10~20倍15.49%の順である。また都市・農村別に見ると、全体的な傾向性とはほぼ一致しているが、農村部では1最低給料未済の総収入しかない世帯が都市部の3倍近い9.55%見られる一方で、最低給料の30倍以上の収入を得ている世帯も都市に比べて多く、12.84%見られる。

表3-16は最低給料を基準に日系とブラジル全体を比較したものである。これによれば、総じて日系世帯の世帯総収入はブラジル全体と比較して高いといえる。ブラジル全体では1~5倍の層が49.9%とほぼ半数を占めているのに対し、日系では19.85%に過ぎず、それ以上の収入のある層のいずれに於いてもブラジル全体の比率を上回っている。特に最低給料の20倍以上を得ている世帯の比率は日系がブラジルの3倍以上見られる。

このように見えてくると、日系人が社会階層帰属意識で中産階級以上と認識する者の比率が59%に及ぶのも首肯されるところである。

表3-16 世帯総収入別世帯数の割合の比較—ブラジル(1986)と日系

最低給料	Brasil	Descend. Jap. †
1 最低給料まで	12,0	3,26
1～5	49,9	19,85
5～10	19,7	20,47
10～20	10,3	15,49
Acima de 20	5,7	16,09

上記の表は最低給料を基準にしてブラジル総人口と日系人口の経済状況を比較したものである。これによれば、そうして日系人口の経済的位置はブラジル全体の中で高いといえる。ブラジル全体では1～5倍の層が49.9%と約半数を占めているのに対し、日系人口では19.85%に過ぎない。また、日系人口においては最低給料の20倍以上の層が16.09%存在するのに対し、ブラジル総人口では5.7%に過ぎない。このようにみると日系人の社会階層帰属意識で中産階級と認識するものが54.94%をしめていることも首肯されるところである。

3-g 農村不動産の所有状況

ブラジルでは同一ムニシピオ(郡)内において都市部地域内に所在する土地を都市部不動産と規定し、農村部に所在する土地を「農村部不動産」と規定している。従って、農村部に所在する農業用地(農牧・植林)また未利用地、農家宅地等全ての土地が「農村部不動産」に含まれる。

以上のように規定される農村部不動産の日系世帯に於ける所有状況をみてみよう。表3-17は農村部不動産の所有状況を都市・農村部別にみたものであるが、これによれば、日系世帯の17.21%が何らかの農村部不動産を所有していることが理解される。これを都市・農村部別にみると、都市部では83%程は農村部不動産を所有していないが、それでも16.4%程は何らかの農村部不動産を所有している。このことは一つには特に地方都市において市街地—都市部に居住しながら農業を営む形態が存在すること、また週末や休暇を過ごすために購入されたシャカラ等の農村不動産を有する都市居住者が存在すること、あるいは投資の対象として購入する者、さらには相続財産として継承した者、ないしは都市移動の際に農村不動産を売却しなかった者等々の存在が考えられる、一方、農村部にあっては農村部不動産の所有・非所有の比率は逆転して、62.57%の世帯が農村部不動産を所有している。ところで農村部にあっても37.4%程の世帯では農村部不動産を所有していない。このことは日系世帯において借地農、分益農形態の農業者の存在や農業労働者の存在といったこと等と関連していると思われる。

表3-18は農村部不動産の所有を所有面積別、都市・農村別にみたものである。これによ

れば11～50 ha未満の農村部不動産を所有する世帯が最も多く6.4%であり、つづいて10 ha未満が5.15%である。また201 ha以上の農村部不動産を有する世帯も1.14%程存在する。これを都市・農村別にみると、都市部では10 ha未満の層と11～50 ha未満の層がそれぞれ5.5%、5.4%と多い。一方、農村部では11～50 ha未満の層が32.3%に及び、続いて10 ha未満12%、51～100 ha未満9.6%の順である。また農村部では100～200 ha未満、201 ha以上もそれぞれ5%程度ずつ見られる。

表3-17 都市・農村別農村不動産所有有無別世帯数の比率

農村不動産	都市	農村	合計
Possuem	16,36	62,57	17,21
Não Possuem	83,12	37,43	68,82
不明	0,51	-	13,96
合計	99,99	100,00	99,99

表3-18 都市・農村別農村不動産所有面積別世帯数の比率

所有面積 (ha)	都市	農村	合計
なし	84,85	35,13	70,02
00～10	5,46	11,96	5,15
11～50	5,35	32,29	6,42
51～100	1,34	9,57	1,71
101～200	0,93	5,53	1,11
201～	0,99	5,23	1,14
不明	1,07	0,30	(*) 4,42
合計	99,99	100,01	99,97

* この数値は調査不能世帯。

3-h 居住環境

日系人の居住環境を居住地域、電化、給水設備、居住家屋のタイプ、居住家屋の居住年数、所有状況、寝室の数、居住ムニシピオの居住年数といった指標からとらえてみよう。

表3-19は日系人が居住する地域を、VILA OU CIDADR URBANA ISOIADA, AGIOMIRADO RURAI <RURALという基準から分類し、示したものである。前述したように(2-bの項)、前2者が都市部、後2者が農村部を構成する。さて、これによれば、日系人口の9割近くはVILA OU CIDADEに居住し、1割がRURALに居住している。一方、URBANA ISOLADA, AGIOMERADO RURAL居住者はそれぞれ2.5%、0.38%と非常に少ない。

表3-20は日系人の居住環境を電化という観点からみたものである。これによれば、全体として日系人の85%は電化された地域に居住している。また、都市・農村部別にみると、都市部では全ての日系人は電化された地域に居住しているのに対し、農村部では7.6%が非電化地域に居住している。

表3-21は日系人の居住環境をABASTTCIMINIO DE AGUA(給水設備)という側面から見たものである。全体的にみると、日系世帯の80.94%はREDE GERAL(水道)が完備された環境に居住している。一方、REDE GERALが完備されておらず、井戸(POCO)あるいは湧水(nascente)、あるいは他の携帯で給水している世帯は5.2%程度である。これを都市・農村別で比較してみるとそこには顕著な差異が存在している。即ち、都市部では全世帯がREDE GERALを持つ環境に居住するのに対し、農村部ではその設備が完備された地域に居住しているのは28%程度であり、残りの8割は給水を別の設備に依存しているのである。表3-22はABASIECIMENTO DE AGUAをブラジル全体と比較したものであるが、ブラジル全体ではREDE GERALが完備された地域に居住するのは7割程度であるのに対し、日系では8割を越え、また農村部でもブラジル全体が11.7%であるのに対し、日系では28%となっている。さらに電化と給水を1958年当時と比較してみると、当時電化に関しては、全体の71.3%が電化地域に居住しており、市街地・農村別では電化はそれぞれ97%、34.4%であった。従って、現在では都市における電化という点では余り変化はないものの農村部の電化がこの30年間で大いに浸透したといえよう。また、給水設備に関しては調査の範疇が異なるので必ずしも適当とはいえないが、一応「蛇口が家の中にある」という範疇をREDE GERAL完備とみなせば、全体で55.5%、市街地・農村別ではそれぞれ77.1%、24.3%がREDE GERAL完備の環境に居住していた。この側面に関しては現在と30年前とに大きな差はないように思われる。

表3-23は日系世帯の居住を居住家屋のタイプ別にみたものである。この表によれば、日系世帯の76%は一戸建家屋(CASA)に居住し、9.6%がアパート(APARIAMENTO)住まいである。これを都市・農村部でみると、農村部ではAPARIAMENTO居住形態は全く

出現せず、全世界CASA住まいである一方、都市においてもCASA住まいが87%と圧倒的に多いがAPARTAMENTO居住も12%程みられる。また、都市部に於いてのみ見られる特徴的な居住形態としてPENSSAOと呼ばれる下宿での部屋住みの形態である(0.44%)この部屋住みの主体を年齢的にみると60歳以上の年齢層が部屋住み人口の36%程度を占めている。表3-24は都市・農村別居住家屋タイプ別にブラジル全体と日系を比較したものである。全体的にみるとブラジル全体と日系との間に、CASA/APARTAMENTO住まいの割合の差異はそれ程存在していない。しかし、その他の居住家屋タイプにおいてブラジルではRUSICOと呼ばれる居住家屋に居住する比率が全体で7.5%程度見られるが、日系ではほとんど見られない。都市・農村別に見ると、都市部ではブラジル全体と同様の傾向性を持っているが、農村部では日系の場合、全世帯がCASA住まいであるのに対し、ブラジルでも78%はCASA住まいであるがRUSICO居住も21%見られる。この点は日系の農村部居住世帯の経済的地位や営農形態と関連するといえよう。

表3-25は居住環境を居住家屋の寝室数という側面からとらえたものである。これによれば、全体的には寝室が2乃至3の住宅に居住するケースが約3割づつみられ、つづいて1寝室の住宅への居住が11.6%である。都市部と農村部とを比較してみると、総じて農村部の方が寝室数の多い住宅に居住しているといえる。こうした都市・農村間の差異は世帯規模、住宅購入・建築の容易性、治安等をめぐる都市でのアパート選択等々を背景としているといえよう。地3-26(1),(2),(3)は寝室数をブラジル全体、都市・農村別に比較したものである。全体的にみれば、日系では1寝室の住宅に居住する割合がブラジル全体の1/3弱と大きく下回っているが2寝室を境に寝室数が多くなると日系がブラジル全体を上回っていく。こうした傾向は都市部、農村部にみられる共通の特徴である。特に農村部では寝室数が4以上の住宅居住は日系がブラジル全体を大きく上回っている。

表3-27は日系世帯の居住の問題を現在居住する家屋での居住年数という観点からみたものである。これによれば、居住年数が10~19年が22.6%と最も多く、1年未満(14.7%)6~9年(14.2%)、20年以上12.4%の順に多い。これを都市・農村別で比較してみると、農村部では20年以上が33%と最も多く、一方、都市部では10~19年が26.4%と最も多い。他方、都市部では1年未満の居住年数の比率が農村部の2倍以上になっている。このことは家屋の所有状況で都市部に賃貸形態がより多くみられること等と関連し、同時にこうした事実は都市人口の移動性の高いことを示している。

表3-28はブラジル全体の居住家屋の居住年数を都市・農村別にみたものである。ブラジル全体をみた場合、11年以上の割合が最も高く、25%程、続いて3-6年22.2%そして1年未満が19.3%である。一方、都市・農村別にみると、都市部では3-6年22.4%、11年以上22.1%とはほぼ同じ割合で出現し、続いて1年未満が21.1%である。他方、農村部では都市部より居住年数が相対的に長く、11年以上居住が31.8%となっている。続いては

3-6年が多く、21.6%である。時間幅のとり方が異なるので厳密な比較は出来ないが、日系世帯では都市・農村部とも総じて同一家屋での居住がブラジル全体より長期に及ぶこと、そしてブラジル全体と同様に都市部よりも農村部の方が同一家屋での居住が長いことが特徴としてあげられる。

表3-29は日系世帯の居住を居住家屋の所有状況からみたものである。これによれば、居住家屋を自己の財産として所有している世帯は全体の60.3%と過半数を示している。一方、賃貸の借家ないしアパート住まいは18.9%である。これを都市・農村別にみると、所有の比率は両者で大きな差異はないが、都市部では賃貸のケースが23.13%と農村部の4倍程度みられる。一方、農村部では家賃を支払わずに、親族、縁者の家屋を借りて居住するCEDIDOSに類似する形態(10.2%)や社宅住まい(13%)の割合が都市部に比して高くなっている。表3-30は居住家屋の所有形態別都市・農村別にブラジル全世帯を区分したものである。これによれば、ブラジル全体では64.1%が自己所有の家屋に居住し、21.6%が賃貸住宅に居住している。またCEDIDOSという形態も14.0%みられる。これを都市・農村別にみると、農村部のほうが若干自己所有形態が高く、賃貸形式は極端に低くなっている。農村部に多くみられる形態はCEDIDOSであり、3割程度存在する。日系世帯に関してもこうした全体の傾向とはほぼ同様な様相を呈している。表3-31は1988年の調査結果を1958年当時と比較したものである。まず全体的にみれば、自己所有の住宅に居住する比率はこの30年間で若干減少し、また賃貸形式も26%から19%へと減少している。都市・農村部別にみると、都市部では1958年当時約半数であった自己所有住宅の割合は30年間で約15%増えて約7割となり、一方約4割見られた賃貸住宅の比率は23%へとほぼ半減している。他方、農村部では自己所有が10%程度減少し、その他の形態がその分増加している。

最後に日系世帯の居住の問題を現住ムニシピオ居住年数からみてみよう。表3-32によれば、現ムニシピオに20年以上居住している日系世帯は48.1%と最も多く、続いては10-19年居住が19.1%と多い。こうした傾向は都市・農村部別でも同様である。一応、10年以上同一ムニシピオに居住している世帯をそのムニシピオへの定着として考えるならば、日系世帯の約8割が現住ムニシピオへ定着しているといえよう。

表3-19 居住地域別男女別人口構成比

居住地域	男	女	合計 (%)
Vila ou Cidade	86,16	88,65	87,50
Urbana Isolada	2,60	2,47	2,51
Aglomerado Rural	0,50	0,27	0,38
Rural	10,65	8,59	9,55
Não Declarada	0,10	0,02	0,06
合計	100,01	100,00	100,00

表3-20 都市・農村別電化の有無別世帯数の比率

電化の有無	都市	農村	合計 (%)
されている	100,00	92,39	85,83
されていない	-	7,61	0,51
不明	-	-	13,67 (*)
合計	100,00	100,00	100,01

*この数値は調査不能世帯。

表3-21 都市・農村別 ABASTECIMENTOS DE AGUA の形態別世帯数の比率

Abastecimento de Água	都市	農村	合計 (%)
Rede Geral	99,28	27,95	80,94
Poço ou Nascente	0,72	68,46	5,15
不明	-	3,59	13,91
合計	100,00	100,00	100,00

表3-22 abastecimento de água

Abastecimento de Água	Total		Urbano		Rural	
	ブラジル	日系人	ブラジル	日系人	ブラジル	日系人
Rede Geral	69,92	80,94	88,72	99,28	11,56	27,95
Poço ou Nascente ou Outra forma	30,08	5,15	11,28	0,72	88,44	68,46

表3-23 都市・農村別居住家屋タイプ別世帯数の比率

居住家屋タイプ	U都市	R農村	T合計 (%)
Casa	87,23	100,00	76,10
Apartamento	12,12	-	9,64
Quarto	0,47	-	0,37
Sem Informação	0,26	-	13,88 (*)
TOTAL	100,08	100,00	99,99

*この数値は調査不能世帯。

表3-24 都市・農村別居住家屋タイプ別世帯数 (BRASIL: IBGE・1986)

Tipo de Moradia	計		都市		農村	
	ブラジル	日系人	ブラジル	日系人	ブラジル	日系人
Casa	82,0	76,10	83,2	87,23	78,0	100,00
Apartamento	8,9	9,14	11,6	12,12	0,6	-
Outros	9,1	0,37	5,2	0,47	21,4	-

(Sem informação: 13,67%)

上表は都市・農村別居住家屋タイプ別にブラジルの状況と日系世帯の状況を比較したものである。これによれば、ブラジルではCASAに居住する世帯の割合が82.0%であるのに対し、日系世帯は76.10%と若干下回り、他方アパートメント居住世帯の比率は殆ど両者に変わりは

ない。ブラジルではRUSTICO居住世帯が全体で7.5%存在するが、日系ではこの居住形態は全く見られない。都市・農村別に見てみると、都市においてはCASA/APARTAMENTO居住の形態で日系世帯の比率がブラジル全体を上回っている。農村部においてはブラジル全体と日系世帯とでは大きな差異が存在している。即ち、日系世帯ではその全世帯がCASA居住であるのに対し、ブラジル全体では21.0%のRUSTICO住まいがみられる。この点は日系の農村部居住世帯の経済的な地位や営農形態等と関連が見られよう。

表3-25 都市・農村別寝室の数別世帯数の比率

寝室の数	都市	農村	合計 (%)
1 Dormitório	13,85	8,96	11,61
2	36,37	31,19	30,99
3	35,91	22,84	30,07
4	9,24	22,24	8,83
5	3,03	13,43	3,31
6 ou mais	0,57	2,69	0,62
不明	1,43	0,45	14,36 (*)
合計	100,04	101,80	99,99 (**)

・ この数値は調査不能世帯。

・ ・ 日系では寝室なしと回答したものが0.17%みられた。

表 3-26 寝室の数別世帯数の比較

(1) 全 体

寝室の数	Brasil	Desc.de Japoneses
1 Dormitório	31,93	11,61
2	39,78	30,99
3	21,31	30,07
4	5,31	8,83
5	0,97	3,31
6 ou mais	0,28	0,62
不明	0,41	14,36 (*)
合計	99,99	99,99 (**)

* 調査不能のケース。

** 日系では寝室無しと回答したものが 0.17%みられた。

寝室の数別世帯数の比較

(2) 都 市

寝室の数	ブラジル	日系人
1 Dormitório	33,45	13,85
2	39,49	36,37
3	20,81	35,91
4	4,74	9,24
5	0,84	3,03
6 ou mais	0,25	0,57
不明	0,42	1,43
合計	100,00	100,04

* 調査不能のケース。

** 日系では寝室無しと回答したものが 0.17%みられた。

寝室の数別世帯数の比較

(3) 農 村

寝室の数	ブラジル	日系人
1 Dormitório	28,30	8,96
2	40,47	31,19
3	22,50	22,84
4	6,68	22,24
5	1,27	13,43
6 ou mais	0,37	2,69
不明	0,40	0,45
合計	100,00	101,80

表 3 - 2 7 都市・農村別居住家屋の居住年数別世帯数の比率

居住年数	都市	農村	合計
Menos de 1 ano	17,58	8,07	14,66
1 - 3	13,63	14,50	11,82
4 - 5	11,94	11,96	10,31
6 - 9	17,05	8,67	14,16
10 - 19	26,42	23,17	22,59
20 anos ou mais	12,76	33,03	12,37
不明	0,62	0,60	(*) 14,08
合計	100,00	100,00	99,99

*この数値は調査不能世帯。

表 3-28 居住家屋の居住年数別世帯数（ブラジル全体—1980—）

Anos de Residência	Urbano	Rural	Total
Menos de 1 ano	21,14	14,95	19,32
1 ano	10,85	8,70	10,21
2	9,61	8,67	9,33
3 - 6	22,40	21,62	22,17
7 - 10	13,04	13,17	13,08
11 anos ou mais	22,09	31,79	24,95
Sem Declaração	0,86	1,09	0,93

ブラジル全体の、居住家屋の居住年数を指標に居住状況をみたのが上記の表である。全体的にみると、11年以上居住の割合が最も高く、24.95%である。続いて3-6年が22.17%と多いが、1年未満しか居住していない世帯も19.32%もみられる。一方、都市・農村別にみても、市街地では3-6年が22.40%、11年以上が22.09%とほぼ同割合である。続いて1年未満の居住が21.14%である。他方、農村部では市街地よりも相対的に居住年数が長く、11年以上の居住が31.79%と最も高くなっている。続いては3-6年が多く、21.62%である。時間幅のとりかたが異なるのでこの全体的傾向性との比較は出来ないが、日系世帯では総じて同一家屋への居住が相対的に長期であること、そして市街地よりも農村部のほうが相対的に同一家屋への居住が長期であるという全体的傾向性との一致が看取される。因みに市街地では10-19年の居住が多く26.42%、農村部では20年以上の居住が多く33.03%である。また、市街地では1年未満の居住も17.58%見られる。

表3-29 都市・農村別家屋の所有関係別世帯数の比率

所有関係	都市	農村	合計 (%)
所有(持ち家)	69,82	70,51	60,31
借家	23,13	5,24	18,89
家賃を支払わず居住	5,44	10,18	5,01
社宅	0,48	13,02	1,35
その他	0,28	-	0,22
不明	0,74	1,05	14,21 (*)
合計	99,89	100,00	99,99

*この数値は調査不能世帯。

表3-30 都市・農村別所有形態別世帯数の割合—1986—

Condição de Ocupação	Urbano	Rural	Total (%)
Próprios	63,4	66,2	64,1
Alugados	27,5	3,5	21,6
Cedidos	8,9	29,2	14,0
Outra Condição ou sem Decl.	0,2	0,4	0,3

ブラジル全世帯を居住家屋の所有形態からみたのが上記の表である。これによれば、全世帯の64.1%が自己の所有する家屋に居住し、21.6%が借家乃至賃貸の社宅に居住している。また、CEDIDOSという形態も14.0%存在する。これを都市・農村別にみると、農村部のほうが若干、自己所有形態が高く、賃貸形式は極端に低くなっている。また、農村部に多く見られる形態はCEDIDOSであり、3割程度存在する。また、市街地に多いのは賃貸形式であり、27.5%見られる。日系世帯に関しても、同様な様相を呈していることが伺われる。しかしながら、農村部居住の日系世帯に於いて、ブラジル全体の傾向としてみられるCEDIDOSがどの程度存在するのか明らかではない。自己所有ではない住宅に住んでいる農村部居住日系世帯は23.20%みられるが、これがCEDIDOSというカテゴリーにそのままあてはまるとはいえない。この23.20%の内訳は家賃を支払わずに現住家屋に居住しているもの10.18%、社宅居住世帯13.02%である。次に、1958年時点の日系世帯の家屋の所有状況と比較してみよう。

表3-31 市街地住宅と農村住宅別所有関係別世帯数の割合-1958-

所有関係	市街地住宅		農村住宅		全体 (%)	
	1958	1988	1958	1988	1958	1988
持ち家	54,7	69,8	81,1	70,5	65,6	60,3
借家	41,4	23,1	3,1	5,2	25,7	18,9
その他	3,9	6,3	15,8	23,2	8,8	6,5

* 1988年度の調査では不祥のケースがあり、必ずしもTOTALが100%ではない。
 まず、全体的な比較を行えば、自己所有形態はこの30年間で若干減少し(5%程度)、また賃貸形式も25.7%から18.89%へと減少している。市街地-農村部別にみると、1958年当時では、約半数程度であった自己所有住宅の割合は約15%増えて、1988年には69.82%となっている。一方、約4割みられた賃貸住宅の割合は1988年には23.13%とほぼ半減している。他方、農村部では自己所有住宅の割合が約10%減少し、その他の形式がその程度増加している。

表3-32 都市・農村別居住ムニピオ居住年数別世帯数の比率

居住年数	都市	農村	合計 (%)
Menos de 1 ano	4,35	4,93	3,88
2~3	4,26	6,87	3,80
4~5	4,03	2,29	3,35
6~9	9,05	6,16	7,59
10~19	22,49	19,19	19,08
20 anos ou mais	54,58	59,86	48,05
不明	0,83	0,70	14,25 (*)
合計	99,59	100,00	100,00

*この数値は調査不能世帯。

図 表

4 社会的側面

4-a 社会階層帰属意識

表4-1 社会階層帰属意識別都市・農村別世帯数の割合—1987—

4-b 世帯

4-b-1) 世帯規模

表4-2 世帯員数別世帯数の割合の比較—ブラジル(1980)—

(a) 全体

(b) 都市

(c) 農村

4-b-2) 世帯構成

表4-3 家族類型別都市・農村別世帯数の比率—1988—

表4-4 同居世代数別都市・農村別世帯数の比率—1988—

表4-5 1958年当時の同居世代数の比率

表4-6 同居完全夫婦組数別都市・農村別世帯数の比率—1988—

表4-7 同居異民族結婚完全夫婦組数別都市・農村別世帯数の比率—1988—

表4-8 世帯構成—世帯主との続柄関係—1988—

表4-9 世帯構成—世帯主との続柄関係—都市・農村の比較—1988—

表4-10 世帯構成—世帯主との続柄関係—ブラジル(1980)との比較

(1) 全体

(2) 都市

(3) 農村

表4-11 世帯構成—世帯主との続柄関係—1958年との比較

4-c 異民族結婚の現状

表4-12 地域別異民族結婚の比率

4-d 言語

4-d-1) ポルトガル語の習得度別人口—10歳以上

4-d-2) 日本語の習得度別人口

4-d-3) 家庭における言語—家庭内での使用言語

表4-13 日本語・ポルトガル語の男女別習得状況

表4-14 日本語・ポルトガル語の都市・農村別習得状況

表4-15 家庭における使用言語別都市・農村別世帯数の割合—1988—

表4-16 家庭における使用言語別都市・農村別世帯数の割合—1958—

表 4 - 17 世帯主夫婦の使用言語別都市・農村別世帯数の割合 - 1988 -

表 4 - 18 世帯主夫婦 - 子供の使用言語別都市・農村別世帯数の割合 - 1988 -

表 4 - 19 世帯主夫婦 - 親の使用言語別都市・農村別世帯数の割合 - 1988 -

4 - e 教育程度

表 4 - 20 教育程度別男女別都市・農村別人口構成比

4 - f 日系団体加入状況

表 4 - 21 日系団体別加入状況別都市・農村別世帯数の割合 - 1987 -

表 4 - 22 日系団体加入状況別男女別人口構成比

表 4 - 23 1958年における日系団体加入状況 - 男女別・都市/農村別

4 - g 宗教

表 4 - 24 宗教別男女別都市・農村別人口構成比 - 1988 -

4 - h 日本食への嗜好

表 4 - 25 日本食を食べる頻度別男女別都市・農村別人口構成比 - 1988 -

4. 社会的側面

4-a. 社会階級帰属意識

日系世帯主が自己世帯をどのような社会階級に位置づけるかをみたのが表4-1である。調査は予め上上、上中、上下、中上、中中、中下、下上、下中、下下の9の範疇に社会階層を区分しその区分基準を皇示することなく、自己の世帯はこの範疇のどれに属するかを設問した。この結果によれば、自己の世帯を上層に位置付けた日系世帯主は僅かに4.1%に過ぎず、多くは中産階級に帰属すると回答した。その比率は54.9%であった。また下層と位置づける世帯主も28.2%見られた。これを都市・農村別に見てみると、双方とも同様な傾向をもつが、強いて言えば農村部居住世帯の方が全体的に高い階層帰属意識を有しているとみることができよう。こうした社会階層意識は 3. 経済的側面 の諸側面に見られる日系世帯のブラジル全体の中での位置から首肯される。

表4-1 都市・農村別社会階層帰属意識別世帯数の比率

社会階層	都市	農村	合計 (%)
上層	4,70	5,81	4,13
中層	63,42	64,23	54,94
下層	17,31	12,67	28,18
不明	14,58	17,29	12,77
合計	100,01	100,00	100,02

4-b. 世帯

(1) 世帯規模

日系世帯の平均規模は3.44人である。但し、この数値には日系世帯を構成する非日系世帯員数は含まれておらず、それを含めれば4.14人という規模になる。表4-2 (1)(2)(3)は日系世帯をブラジル全体及び都市・農村別に比較したものである。ブラジル全体と比較すると日系では1~2人と8人以上の世帯規模の比率がブラジル全体よりも下回り、一方3~7人という規模に於いて上回っている。3~4人、5~7人の日系の比率には大きな違いはない。こうした傾向は都市部においてもそのまま当る。都市部居住日系世帯では3~4、5~7の世帯規模を持つ世帯の比率はそれぞれ42.4%、41.4%と全体の8割以上を占めている。農村部では5~7人、3~4人から構成される世帯が多く、それぞれ

39.9%、38.6%である。また、ブラジル農村部全体と比較すれば、1～2人の世帯と1.1人以上の世帯では日系が全体を下回っているが、3～7人では日系が上回り、8～10人では両者に大きな差異は存在していない。このように見てくると、日系の世帯規模はブラジルでは中規模であるといえ、また日系世帯は農村部に於いて世帯規模が相対的に大きいといえることができる。

(2) 世帯構成

日系世帯の特徴を日系世帯の内部構成という観点からみていこう。まず、日系世帯の家族的構成を家族類型別にみよう。表4～3は家族類型別都市・農村別に日系世帯をみたものである。これによれば、日系世帯の家族的構成は夫婦家族形態→世帯主夫婦とその未婚の子女→が60.9%と圧倒的に多い。続いては直系家族的形態12.6%、単身4.6%である。都市・農村部を比較すると、夫婦家族的形態は両者に大きな差はないが、都市部では単身世帯の比率が農村部の2倍近くにおよび、一方、直系家族は農村部が都市部をうまわっている。また傍系家族、非親族を含む世帯の割合は都市部に多い。この傍系家族や非親族を含む世帯の都市部における出現は都市部に於ける世帯の規模とは関連がなく、むしろ後述するように比較的遠い、少数の親族縁者から構成されていたり、友人との共住といった居住形態と関連するのである。

また、この調査結果を1958年の資料と比較すると、夫婦家族の比率は1958年当時で61.3%と現在と大きな差はないが、直系家族形態は22.8%から12.6%へと減少し、傍系乃至姻族を含む世帯も7.7%から4.1%へと減少している。

次に世帯の内部構成を同居世代数という観点からみてみよう。

表4-4は日系世帯を同居世代数別、都市・農村別に示したものである。これによれば、2世代同居が圧倒的に多く58.0%を占めている。続いて多いのは1世代同居であり(15.5%)、3世代同居がそれにつづく(12.5%)、都市・農村別にみると、都市部において1世代同居が多く、逆に3世代同居は農村部に相対的に多い。一方、2世代、4世代以上の同居の比率は両者に大きな差は認められない。こうしてみると、世帯規模や世帯の家族的構成とも関連して農村部の方が世帯構成がより複雑で大きいといえるであろう。また、今回の結果を1958年当時と比較してみると、2世代同居の割合が70.6%から58.0%へ、3世代以上同居の割合が25.0%から12.9%へとそれぞれ減少し、他方1世代同居の割合が4.4%から15.4%へと大きく上昇している。(表4～5は1958年当時の同居世代を戦前移民、戦後移民、ブラジル生れという3つの範疇に区分し、示したものである。)

さらに世帯の内部構成を世帯内に同居する完全夫婦の組数からとらえてみよう(表4-6)。これによると、最も多いのが1組の完全夫婦が同居する世帯で、全体の67.6%に

及んでいる。次いで多いのは1組の完全夫婦も存在しない世帯で12.5%みられる。都市農村別にみると、都市部においては世帯内に1組の完全夫婦も同居していない世帯の比率が農村部の3倍近くみられ、一方、農村部では若干ながら2組以上の完全夫婦の同居の割合が高い。こうした事実は都市部においては単身世帯が農村部に比して多く存在することや農村部の方の世帯が相対的に規模が大きいということ等と関連していよう。さらに言えば、都市部において欠損家族の存在が予想されるところである。また、完全夫婦の同居という問題に関連して、世帯内部構成を異民族結婚—配偶者のどちらかが非日系人—の完全夫婦の世帯への同居という観点からみたのが表4—7である。これによれば、世帯内に異民族結婚の完全夫婦がまったく存在していない世帯は全世帯の53.0%であり、同カップルを1組ないしそれ以上ふくむ世帯は33.4%である。この事実は異民族結婚という現象が日系世帯では日常的なものとなりつつあるということを物語っている。また、世帯主の年齢との関連でいえば、30～45歳の年齢層で異民族結婚のカップルがもっとも多く出現し、その年齢の上昇とともにその出現は減少するという傾向が認められる。また30歳未満層でその出現が少ないのは異民族結婚の減少というよりはこの年齢層に多くの未婚者が含まれるからだといえよう。さらに都市・農村部を比較すると、異民族結婚のカップルは都市部に多い(39.5%：29.8%)

さて、最後に世帯構成を世帯主との続柄関係で分類し、千分比—世帯主を1,000とした時に、それぞれの続柄をもつ世帯員の数値—でしめたものである。ここではこれらの表から読取れる特徴を簡条書きに示そう。

- (1) 最も多く同居するのは子であり、平均すると世帯内に2人が同居する。配偶者は0.7人で、続いては孫との同居が多い。
- (2) 同一世帯内に含まれる直系尊属は世帯主1,000に対して、110.8であり、その中では母が81.3、父27.4であり、祖父母の比率は当然ながら低くなっている。
- (3) 傍系縁者には兄弟姉妹、オジ・オバ、イトコ、甥姪がみられるが、あわせても67.6にすぎない。
- (4) 非親族の同居人では友人や使用人等が見られる。
- (5) 世帯規模とは直接関連しないが、相対的にみて、都市部の世帯の方が同居する親族関係者はヴァリエーションに富んでいるといえる。
- (6) 子の同居は都市部2.0に対し、農村部2.3と農村部の方が高い。
- (7) (3)と関連するが、都市部でのみ出現する関係者に連れ子、養子、配偶者の親、オジ・オバ、イトコがいる。
- (8) 農村部では使用人との同居が見られる。
- (9) 農村部では直系の親族関係者との同居が多く、一方都市部ではより遠い、傍系や姻族との同居が多く見られる。

次にこうした世帯の内部構成をブラジル全体と比較してみよう。表4-10 (1)(2)(3)は1980年のブラジル全体、都市・農村別世帯主との続柄変同居世帯員の比率を日系との比較において示したものである。まず全体的に見れば、

- (1) 子の同居という点ではブラジル全体の方が日系2.1に対し2.4と上回っている。
- (2) 親や配偶者の親との同居という点では日系が上回っている。
- (3) 配偶者との同居はブラジルが若干日系を上回っている。

都市・農村別にみても上記のような特徴が同様に看取される。とくに農村部において日系では同居する子の数でブラジル農村全体より低いものの、親や配偶者の親、その他の親族関係者との同居ではブラジル全体を上回っている。

表4-11は1958年当時の日系世帯の、世帯主との続柄関係別同居世帯員の比率を示したものである。参考までに掲載する。

表4-2 世帯員数別世帯数—ブラジルとの比較—

世帯員数	(1) 全体	
	ブラジル (1980)	日系人 (%)
1 - 2 Pessoas	19,74	9,88
3 - 4	34,86	42,08
5 - 7	32,43	41,28
8 - 10	10,32	5,33
11 ou mais	2,70	1,44
合計	100,05	100,01

世帯員数別世帯数—ブラジルとの比較—

世帯員数	(2) 都市	
	ブラジル (1980)	日系人 (%)
1 - 2 Pessoas	20,75	10,29
3 - 4	36,56	42,42
5 - 7	31,64	41,42
8 - 10	8,57	4,49
11 ou mais	2,08	1,38
合計	99,60	100,00

世帯員数別世帯数—ブラジルとの比較—

世帯員数	(3) 農村	
	ブラジル (1980)	日系人 (%)
1 - 2 Pessoas	17,35	5,64
3 - 4	29,84	38,56
5 - 7	34,16	39,91
8 - 10	14,50	13,98
11 ou mais	4,16	1,92
合計	100,01	100,00

表4-3 都市・農村別家族類型別世帯数の比率

家族類型	都市	農村	合計	%
単身世帯	5,52	2,85	4,58	
夫婦家族	70,70	69,72	60,93	
直系家族	14,95	20,84	12,58	
傍系家族	4,95	2,40	4,12	
非親族を含む家族	4,35	4,20	3,74	
不明	0,40	-	13,99	(*)
合計	100,87	100,01	99,94	

*この数値には調査不能世帯も含まれている。

表4-4 都市・農村別同居世代別世帯数の比率

同居世代	都市	農村	合計	%
1世代	18,36	11,99	15,42	
2世代	67,11	68,82	58,03	
3世代	14,08	18,74	12,46	
4世代以上	0,45	0,45	0,39	
不明	-	-	13,67	(*)
合計	100,00	100,00	99,97	

*この数値は調査不能世帯。

表4-5 1958年当時の同居世代数の比率

	1世代	2世代	3世代	4世代
戦前移民	3,8	71,2	25,4	0,6
戦後移民	9,4	79,6	10,6	0,4
ブラジル生れ	7,8	73,6	18,0	0,6
1988	15,42	58,03	12,46	0,39

*1988年では不詳が13.7%存在する。

1958年と1988年とを比較すると、1世代同居が増え、その分2世代同居の割合が減ったといえよう。3世代同居は戦後移民の家族よりは多くみられるが、戦前移民・ブラジル生れよりは少ない。

表4-6 都市・農村別同居完全夫婦組数別世帯数の比率

同居完全夫婦組数	都市	農村	合計 %
なし	15,06	5,09	12,45
1組	77,70	86,23	67,63
2組	6,68	8,08	5,86
3組以上	0,57	0,60	0,49
不明	-	-	13,55 (*)
合計	100,01	100,00	99,98

*この数値は調査不能世帯。

表4-7 都市・農村別同居異民族結婚完全夫婦組数別世帯数の比率

同居完全夫婦組数	都市	農村	合計 %
なし	60,55	70,25	53,04
1組	38,95	29,45	32,99
2組	0,50	0,30	0,42
不明	-	-	13,55 (*)
合計	100,00	100,00	100,00

*この数値は調査不能世帯。

表 4 - 8 世帯構成—世帯主との続柄

世帯主との続柄	合計	1/1000
世帯主	1,000	
配偶者	706,3	
子	2,038,5	
子の配偶者	58,2	
孫	159,7	
父	27,4	
母	81,3	
祖父	2,1	
祖母	-	
配偶者の親	22,7	
兄弟姉妹	36,8	
兄弟姉妹の配偶者	25,7	
オジ・オバ	3,0	
イトコ	1,3	
甥・姪	26,5	
連れ子	2,6	
養子	18,0	
友人	24,0	
使用人	0,4	
その他の非親族	0,9	
不明	17,7	

表 4-9 世帯構成—世帯主との続柄

世帯主との続柄	都市	農村
世帯主	1,000	1,000
配偶者	710,5	694,8
子	2,015,0	2,370,9
子の配偶者	56,9	79,8
孫	148,5	295,8
父	27,3	23,5
母	79,9	89,2
祖父	2,4	-
祖母	-	-
配偶者の親	24,9	-
兄弟姉妹	35,2	47,0
兄弟姉妹の配偶者	27,3	93,9
オジオバ	3,8	-
イトコ	1,4	-
甥・姪	27,3	32,9
連れ子	19,7	-
養子	18,8	-
友人	25,9	-
使用人	-	4,7
その他	-	9,4

表4-10 世帯構成-世帯主との続柄-ブラジルとの比較

(1) 全 体

世帯主との続柄	ブラジル (1980)	日系人 (1988)
Chefe	1.000	1.000
Cônjuges	789,9	706,3
Filhos ou Enteados	2.414,4	2.059,1
Pais ou Sogros	56,4	131,4
Outros Parentes	307,8	313,3
Agregados	38,2	(24,9) (*)
Pensionistas	12,9	0
Empregados Domésticos	33,2	0,4
Parentes do Empregado	1,9	0

* 日系の場合、この数字は友人関係を示すものである。

世帯構成-世帯主との続柄-ブラジルとの比較

(2) 都 市

Chefe	1.000	1.000
Cônjuges	769,8	710,5
Filhos ou Enteados	2.204,2	2.053,5
Pais ou Sogros	61,4	132,1
Outros Parentes	327,1	302,8
Agregados	38,8	(25,9) (*)
Pensionistas	15,5	0
Empregados Domésticos	44,2	0
Parentes do Empregado	2,4	0

* 日系の場合、この数字は友人関係を示すものである。

世帯構成—世帯主との続柄—ブラジルとの比較

(3) 農 村

Chefe	1.000	1.000 (**)
Cônjuges	838,2	694,8
Filhos ou Enteados	2.916,5	2.370,9
Pais ou Sogros	44,5	112,7
Outros Parentes	261,9	549,4
Agregados	36,7	0
Pensionistas	6,6	0
Empregados Domésticos	6,9	4,7
Parentes do Empregado	0,6	0

* 日系の場合、この数字の数値の他にその他の関係者が9.4含まれている。

表4-11 世帯構成—世帯主との続柄関係—1958年との比較—

	市街地		農村		合計 (1988)
	移民	ブラジル生	移民	ブラジル生	
配偶者	15,5	19,8	14,3	16,4	21,8
子	68,2	55,2	67,5	57,4	62,7
直系尊属	2,9	7,3	2,8	7,7	3,4
子の配偶者及び孫	8,8	0,1	11,2	0,1	6,7
兄弟姉妹	2,9	14,5	2,5	14,7	1,1
傍系	1,1	2,3	1,4	3,1	2,1
姻族	0,6	0,8	0,3	0,6	1,5
連れ子・養子	-	-	-	-	0,6

4-1 c. 異民族結婚の現状

既に、第2節 d, e の項で混血日系人の存在から予想されたように、現在に於ける日系人の非日系人との婚姻、即ち異民族結婚は広く見られる現象となっている。

表4-12は地域別に異民族結婚と日系人同士の結婚の比率を示したものである。これによれば、異民族結婚の出現には地域的な差が存在している。最も日系×非日系の婚姻の比率が高いのは中西部で69.2%、続いて北部の62.5%である。一方、全く異民族結婚が現れないのは東北部であり、次にその比率が低いのは南部である。サンパウロ市内やグランデ・サンパウロでも日系×非日系の婚姻は平均の45.9%を下回っている。こうした異民族結婚の現れ方の差異は恐らく、日系人の地域的居住の歴史乃至移住の形態の地域的差異、あるいは日系人口の集中の差、地域日系コミュニティの規制力等々に関連しているだろう。例えば、南部の異民族結婚の比率が低いことは北パラナに於ける日系人口の集中、その地域のコミュニティの規制力の強さ等からある程度の説明が可能ではないかと思われる。また、北部や中西部での高さは日系人口の稀薄さや移住形態等と関連するであろう。いずれにしろ、この異民族結婚の出現の差異はこうした諸要因やさらに経済的条件等から多角的にとらえることが必要であろう。さらには非日系配偶者の社会的条件や人種的条件からも検討されねばならないだろう。ここでは、事実としての異民族結婚の比率を示すにとどめる。

表4-12 地域別異民族結婚の比率

地域	日系×日系	日系×非日系	(%)
北部	37,5	62,5	
東北部	100	0	
サンパウロ市	57,3	42,7	
グ、サンパウロ	61,5	38,5	
サンパウロ州	57,4	48,6	
小計	52,3	47,7	
南部	76,7	23,3	
中西部	30,8	69,2	
合計	54,1	45,9	

4-d. 言語

(1) ポルトガル語・日本語の習得度別人口

日系人口(10歳以上)の社会的・文化的特質をポルトガル語と日本語の習得程度を男女別、都市・農村別に示したのが表4-13, 4-14である。この調査は日本語とポルトガル語の習得をまず会話と読み書きとに分け、それぞれを「全く出来ない」「少しは出来る」「十分出来る」という3つの範疇に区分し、被調査者が自己申告というかたちで回答したものである。つまり何等の日・ポ語の知識を客観的に調査したものではなく、自己が自己のそれぞれの言語をどの程度習得しているかに関する自己認識をとうたものである。ここでは会話の部分に関する結果表から日系人がどのような認識を持っているかを見ることにしよう。

まず、男女別にみると男子では日本語・ポルトガル語とも「十分に出来る」と認識する者が36.1%と多く、続いては日本語は「全く出来ず」、ポルトガル語は「十分に出来る」と認識する者32.8%、日本語は「少し出来る」、ポルトガル語は「十分出来る」と認識する者25.4%となっている。女子でも同様にこうした傾向を持っている。また、都市・農村別にみても男女別と同様の傾向がみられるが、農村部居住者の方が都市部居住者に比して、どちらの言語とも「十分出来る」と認識する割合が高くなっており、その分、日本語が全く出来ないか少し出来る、ポルトガル語は十分できるという範疇の割合が低くなっている。

(2) 家庭内に於ける言語

次に家庭内で実際に使用される言語に関してみることにしよう。表4-15は都市・農村別に家庭で使用される言語が何かを設問したものである。回答の範疇は3つでポルトガル語、日本語、ポルトガル語と日本語の併用である。表4-15によれば、過半数の日系世帯ではポルトガル語が日常的に使用されている(55.9%)。一方、日本語が使用されている世帯は僅かに6.3%であり、ポルトガル語・日本語の併用は19.7%であった。このことは日系人口が既に2, 3世を主体とする構成になっていることや都市的環境での生活ということと関連していよう。都市・農村別に家庭内使用言語をみても都市・農村部でもポルトガル語使用世帯の比率が最も大きい。ポルトガル語使用世帯の割合は都市部において農村部よりも多くみられ(66.3%:47.4%)、逆に日本語使用家庭の比率は農村部が都市部の3倍以上になっている(6.0%:2.1%)。一方、日本語とポルトガル語併用の家庭の比率は都市・農村とも大きな差はない。ここには現れないが、世帯主の年齢別にみても、日本語使用の割合は年齢が上昇するに従い高くなっていく。一方、ポルトガル語ではこの傾向が逆転している。

表6-16は1958年の家庭内使用言語の調査結果である。これによると市街地・農

村部ともに日本語使用が多くみられ、一方ポルトガル語使用はいずれも20%未満である。また、市街地・農村部を比較すると、日本語の使用は農村に於いて高く、ポルトガル語の使用は市街地において高いといえよう。これ 1988年と比較すれば、日本語とポルトガル語の家庭における使用の割合がこの30年間で完全に逆転してしまったといえるであろう。

次に家庭内使用言語を家庭内にある主要な人間関係別にみてみよう。表4-17は世帯主夫婦間で使用される言語を都市・農村別に示したものである。これによれば、世帯主夫婦がポルトガル語を使用するケースが48.4%と最も多く、日本語及び日本語とポルトガル語との併用はそれぞれ12%台でできている。これを都市・農村部別にみると、都市部ではポルトガル語使用の比率が高く(57.3%:40.5%)、逆に農村部では日本語使用の割合が高い(13.0%:32.6%)、また、日・ポ併用も農村部の方が若干高い。さらに年齢別にみると、ポルトガル語使用のケースは年齢が上昇するに従い減少し、日本語では逆の傾向がみられる。世帯主夫婦と子供の間で使用される言語という観点から家庭内コミュニケーションをみたのが表4-18である。これによれば、親・子間のコミュニケーションはポルトガル語を通じてなされる世帯が50.8%と過半数を占めている。一方、日本語の使用は僅かに4.4%に過ぎない。これを都市・農村部別にみると、都市部においては農村部に比してポルトガル語使用ケースが高く、農村部では日本語使用の割合が都市部に比して高くなっている。

世帯構成の特徴から日系世帯内に世帯主夫婦と親との同居はまれであるが、こうした人間関係が出現する世帯に関し、世帯主夫婦・親との間での使用言語をみたのが表4-19である。これによれば、日本語使用が最も多く(38.9%)、つづいて日・ポ併用(32.8%)、ポルトガル語(28.3%)これを都市・農村別にみると、都市部ではポルトガル語使用の割合が高く、農村部では日本語使用が7割近くに達している。また日・ポ併用は都市部に於いて多くみられる。

表4-13 日本語・ポルトガル語の習得程度

日本語	ポルトガル語	男	女
全く出来ない	全く出来ない	0,02	-
	少しは出来る	0,30	0,41
	十分出来る	32,75	33,56
少しは出来る	全く出来ない	-	-
	少しは出来る	0,23	0,66
	十分出来る	25,41	26,60
十分出来る	全く出来ない	0,97	2,20
	少しは出来る	4,20	7,86
	十分出来る	36,08	28,69

表4-14 日本語・ポルトガル語の習得程度

日本語	ポルトガル語	都市	農村
全く出来ない	全く出来ない	0,01	-
	少しは出来る	0,38	0,12
	十分出来る	34,74	19,18
少しは出来る	全く出来ない	-	-
	少しは出来る	0,45	0,38
	十分出来る	26,16	24,26
十分出来る	全く出来ない	1,57	1,39
	少しは出来る	5,32	12,19
	十分出来る	31,33	42,43

表4-15 都市・農村別家庭における使用言語別世帯数の比率

使用言語	都市	農村	合計
Portugues	66,25	47,38	55,92
Japonês	6,04	21,67	6,26
Portugues-Japonês	22,33	28,70	19,70
単身世帯**	4,81	2,24	4,1
不明	0,57	-	**14,00
合計	100,00	100,01	99,98

*この数値は調査不能世帯。

**この中には非親族（非日系）との同居等のものを含む。

表4-16 家庭に於ける使用言語別都市・農村別世帯数の割合—1958—

居住地	市街地	農村
ポルトガル語	18,7	11,4
日本語	44,9	60,5
日本語とポルトガル語	36,4	28,1
合計	100,0	100,0

上記の表は1958年の調査結果である。これによると、市街地・農村部ともに日本語の使用が多くみられ、一方ポルトガル語の使用はいずれも20%未満である。市街地と農村を比較すると、日本語の使用は農村において高く、ポルトガル語の使用は市街地において高いといえる。これを1989年の調査結果と比較すると、日本語とポルトガル語の割合が完全に逆転していることが看取されよう。

表 4-1-7 都市・農村別世帯主夫婦の使用言語別世帯数の比率

使用言語	都市	農村	合計
Portugues	57,33	40,51	48,35
Japonês	12,98	32,59	12,51
Portugues-Japonês	13,14	19,88	12,11
世帯主夫婦が不完全**	15,59	7,03	13,00
不明	0,57	-	**14,00
合計	99,61	100,01	99,97

*この数値は調査不能世帯。

**この中には世帯主夫婦のどちらか一方が離・死別等の理由で同居していないケースや世帯主が独身のケース等がふくまれる。

表 4-1-8 都市・農村別世帯主夫婦一子間の使用言語別世帯数の比率

使用言語	都市	農村	合計
Portugues	59,77	48,13	50,80
Japonês	3,81	20,93	4,38
Portugues-Japonês	14,81	16,14	12,87
当該関係なし	21,12	14,80	17,92
不明	0,57	-	*14,00
合計	100,08	100,00	100,00

*この数値は調査不能世帯。

表 4-19 都市・農村別世帯主夫婦一親間の使用言語別世帯数の比率**

使用言語	都市	農村	合計
Portugues	28,08	15,49	28,34
Japonês	33,73	67,61	38,89
Portugues-Japonês	32,55	16,96	32,77
不明	5,64 **	-	-
合計	100,00	100,00	100,00

*この数値は調査不能世帯。

**こうした世帯主夫婦と親の同居が見られないケースが多数をしめている。上記の表ではこうした世帯は除外して傾向性がみられた。

4-e. 教育程度

教育程度に関する結果表は最終報告書の中で取上げることとし、ここでは記載しない。

4-f. 団体加入

表 4-21 は日系世帯の日系団体加入状況をみたものである。これによれば日系世帯の世帯としての日系団体加入率は 24.0% である。都市と農村部の加入状況をみると、都市部 24.9%、農村部 55.6% であり、農村部での加入率は都市部の約 2 倍になっている。日系世帯の加入がもっとも高いのは地域文協であり、その加入率は 17.4% である。表 4-22 は日系人口の日系団体への加入状況を男女別に示したものである。個人レベルでは日系団体への加入は全体の 34.2% であり、6 割以上は日系団体に加入していない。また男女間に加入率の大きな差は存在しない（男：17.1%；女：16.7%）。また、都市・農村別にみると世帯レベルと同様に農村部居住人口の加入が都市部の約 2 倍となっている。

こうした結果を 1958 年当時と比較してみよう。表 4-23 は当時の日系団体加入状況を示したものである。全体的にみれば、1958 年時点と比較すると、日系団体への加入率は増加している（27.7%：34.2%）。このことは 1958 年当時では協同組合や労働組合等の経済、職能団体が含まれていないのに対し、今回はあらゆる日系団体が含まれているという基準の差異が関連していると予想されるし、現在の方が様々な目的を持った日系団体が数多く組織されているという事実とも関連していよう。男女別にみれば、1958 年当時では男女間に加入の大きな差が存在していたが、現在では男女間の加入の差はなくなっている。また、1958 年当時では都市・農村間に農村部でやや高い加入率を示しながらそれ程は存在していなかったものが、現在では都市・農村間で倍近い加入の差がみられる。このこ

とは都市部において日系社会の規制力が弱体化したということや日系という枠組みが団体加入の決定に際し選択基準の一つになってきたこと等と関連しよう。

表4-22 日系団体加入状況別男女別人口構成比

加入・未加入	男	女	合計
加入	33,95	34,16	33,88
未加入	64,88	64,63	64,92
不詳	1,17	1,21	1,19
合計	100,00	100,00	99,99

表4-21 都市・農村別日系団体加入状況—世帯単位—

日系団体の種類	都市	農村	合計
文協(会館)	17,78	46,50	17,40
県人会	2,01	0	1,60
日系クラブ	3,84	0,45	3,09
日系宗教団体	1,70	0,30	1,37
その他	0,34	3,59	0,51
未加入	74,64	49,25	76,04
合計	100,31	100,09	100,01

表4-23 1958年における日系団体加入状況—男女別、都市・農村別

加入 非加入	男	女	市街地	農村	合計
加入*	41,0	16,5	27,0	31,4	27,7*
非加入	53,6	81,9	67,7	66,9	74,4

*加入にはブラジル系日系団体と日系団体の加入率が加算されている。

4-g. 宗 教

表4-24は宗教別に日系人口の構成比を示したものである。調査の際には信仰している全ての宗教が調べられた。中には複数帰属のケースも見られたが、それは当該表には現れない。また、日系宗教に関しては具体的な宗教名(教団名)も調べられたがここでは触れない。

さて、まず全体的傾向をみると、最も多いのはカトリック教で全体の6割弱が信仰する。続いては日系宗教が24.9%、信仰なし10.6%が多い。次に男女別にみると男子の方が信仰を持たない比率が高く、女子ではカトリック教の比率が男子に比べて高くなっている。また、都市・農村部別にみると、都市部では信仰なしとカトリック教の比率が農村部に比べて高く、一方、農村部では日系宗教の比率が相対的に高くなっている。日系宗教の中には既成仏教や神道も含まれており、都市型宗教と言われる日系宗教が深く浸透している都市部より農村部により高い比率が出現したと思われる。

表4-24 宗教別日系人口構成

宗教	男	女	都市部	農村部	合計
Não tem	12,84	8,20	10,85	8,77	10,64
Católica	57,65	60,80	60,79	45,54	59,19
Protestante	3,18	3,04	2,71	6,61	3,12
Seita Orig.Jap.	24,20	25,69	23,36	38,17	24,90
Outras	2,09	2,25	2,29	0,88	2,14

上記の表は宗教別に日系人口の構成比をみたものである。調査の際には信仰している全ての宗教を調べた。中には複数帰属のケースもみられたが、それは当該表には現れない。また、日系宗教に関しては具体的な宗教名も調査してある。

さて、まず、全体的傾向をみると、もっとも多いのはカトリック教で全体の6割弱みられる。つづいては日系宗教が24.90%、信仰無し10.64%である。次に男女別にみると、男子の方が信仰を持たない比率が高く、女子ではカトリック教の比率が男子に比べて高くなっている。また、都市・農村別にみると、都市部では信仰なしとカトリック教の比率が農村部に比べて高く、一方農村部では日系宗教の比率が相対的に高くなっている。日系宗教のなかには、既成仏教もふくまれており、都市型宗教と言われる日系新宗教が深く浸透している都市部よりも高い比率が現れたと予想される。

表 4 - 2 5 日本食を食べる頻度別人口構成比

日本食を食べる頻度	男	女	都市部	農村部	合計
Come Raramente	19,44	16,64	18,05	17,60	18,11
Come às Vezes	23,06	21,56	22,12	25,03	22,34
Come Frequentemente	57,49	61,78	59,81	56,75	59,55

日本食を食べる頻度を上表のように3範疇に区分して、日系人口を分類してみた。調査に際しては、日本食は何かということは被調査者の判断にゆだねた。これによれば、もっとも多いのは「良く食べる」という範疇で6割近く見られた。また、男女別、都市・農村別に示してみたが、底に顕著な差異は存在していない。強いていえば、女子の方に日本食への指向が若干高いといえる。

付表1 1年間の動き—移動の方向—

移動の方向	男	女	都市部	農村部	計	%
R—R	0.33	0.18	—	2.61	0.26	4.48
R—U	0.13	0.02	—	0.20	0.08	1.38
U—R	—	—	—	—	—	—
U—U	6.24	4.74	6.07	—	5.47	94.15
不明	—	—	0.06	—	—	—

上記の表は日系人口の移動（国内移動のみ）を移動の方向から示したものである。1987年～1988年の一年間での移動は全体人口の5.81%におよんだ。全体的にみると、都市間の移動（U—U）の移動が殆どで94.15%である。続いては農村間の移動が多いが、その比率は全体の4.48%にすぎない。

移動の方向	男	女	都市部	農村部	合計
R—R	4,93	3,64	—	92,88	4,48
R—U	1,94	0,40	—	7,12	1,38
U—R	—	—	—	—	—
U—U	93,13	95,95	99,02	—	94,15

（都市部に移動の方向不明の例が0.08%存在する）

次に、都市・農村別にみると、都市居住者は都市間の移動がほとんどであり、逆に農村部居住者は農村間移動が殆どであり、都市—農村間の移動は全く見られず、農村—都市間の移動も7.12%見られるに過ぎない。

5. 用語の解説

日系人……………日系人とは日本人移民およびブラジル長期滞在者とその子孫をさし、この日本人を祖先の一人として持っているブラジル在住の者はすべて含まれている。従って、この概念の中には、日系企業の長期滞在者及びその家族（日系）員や混血日系人も含まれる。

日系世帯……………上記のように定義される日系人を一人でも世帯員にもつ世帯とする世帯とは家計を同一とする共住集団であり、多くの場合、世帯は親族関係を中心に組織されるが（この場合、世帯は家族と一致する）非親族関係者をふくむ場合もある。

世帯規模……………世帯を構成する世帯員の数。

世帯の世代構成…世帯内に同居する世代数をいう。単に「世代」というときは別の意味を持つ。

1 世代……………世帯員が相互に尊属卑族の関係にない場合。例えば、兄弟姉妹や友人との同居。

2 世代……………親と子及びそれに類似する関係者が同居する場合。

3 世代……………祖父母及びそれに準ずる関係者を含む場合。

4 世代……………曾祖父母乃至み孫あるいはそれに準ずる関係者を含む場合。

続柄関係……………世帯主と世帯員との間にある親族・姻族、社会関係等の関係をいう。

家庭類型……………世帯の内部構成を家族関係から見るために用いる分類基準。ここでは単身世帯、夫婦家族、直系家族、傍系家族、非親族をふくむ世帯という範疇を用いた。

単身世帯……………一人で生活し独立の家計を有するもの。ここではペンソンと呼ばれる下宿住まいで一つの部屋を数人で共有する際も、家計的にはそれぞれが独立しているという観点から単身世帯とした。但し、兄弟や親戚がこうした状況にある時にはこの限りではない。

夫婦家族……………1組の夫婦とその未婚の子女から構成される家族。但し、子が存在夫婦のみの場合や夫婦のどちらかが欠けている欠損家族も便宜上この範疇とした。

直系家族……………世帯主（乃至配偶者）の直系親族。ないしは有配偶の子乃至孫を含む家族。この範疇では傍系親族は未婚であり、直系親族も同一世代内では一人を除き、未婚であることを条件とする。

傍系家族……………これまでの家族構成に既婚の傍系親族を1組ないしそれ以上含むような家族。例えば、世帯主夫婦とその既婚の兄弟姉妹とが同居するというような家族。

非親族をふくむ世帯…上記の家族に使用人や友人等の非親族関係者を含む世帯をいう。

世帯主……………その世帯を代表する個人で、世帯員からそのように認識されている世帯員。

また例えば、学生同士で住宅を賃貸し、家計も等分に分割し生海を営むような、いわゆる REPUBLICA のような形態では便宜的に最年長者を世帯主と見なした。

世代……………単独で世代という用語が使用される時には、次のような意味を有する。日本人移住は1世であり、1世同士の夫婦から生れた日系人は2世、2世同士の夫婦から誕生した日系人は3世である。世代を異にする夫婦から誕生した日系人はより新しい世代+1をその個人の世代とする。例えば、1世と2世の夫婦から生まれた子は3世である。また、混血日系人が多く存在しているという事実と関連して、5世を除く各世代では「純」と「混」というサブカテゴリーを設定した。例えば、1世と非日系人から生れた子は2世混となるし、2世純の日系人と非日系人から生れた子は3世混となる。この概念は自己をどのように認識しているかに係わる IDINITY の範疇ではなく、あくまで系・上の客観的事実から理解されたものであり、文化的背景の共通性等とは関連性を持たない。

個人日系度……………個人日系度という概念は日系人口の混血度を客観的にとらえようという目的のもとに作られた考え方である。個人日系度は日本人（混血していない日系人）を1、非日本人（非日系人）を0とし、父と母が持つ上位世代からの日系度の平均を個人の日系度としたものである。日系人間の婚姻が継続する限り、この婚姻関係から誕生した子は常に1という日系度を持つわけである。例えば、日本人ないし混血していない日系人の父（1）と非日本人の母（0）から生れた子の個人日系度は $(1+0) \div 2 = 1/2$ となる。尚、この概念はなんら文化的意味を有していない。

配偶関係……………LGBTの基準に準じている。

1. 既婚・有配偶—CASAMENTO CIVIL及び/あるいはCASAMENTO RITGIOSOによって結付く個人ないしUNIAO CONSENSUAL TSTAVTLで結付く個人と同居する者。
2. 未婚・独身—上記のような個人と同居したことのない者。即ち、広義の婚姻の経験をゆうさない者。
3. 離・死別—1.で述べたような個人と何らかの事由で離婚あるいは別居乃至死別し、再婚していない者。

活動内容……………ここでは活動内容は仕事、家事、勉学、求職中、その他に区分されている。

活動内容は10歳以上の日系人口に関して調査された。但し、各個人が単一

の活動を日常的に行っているのではない。一人の個人が日常的に複数の活動を行っていることもまれではない。そこで、こうした事情を考慮し、調査では1.専らと2.主にというカテゴリーを設定している。たとえば、仕事のみを日常的な活動とするものは「専ら仕事」ということになる。また、仕事をしながら勉強もしているという個人に関してはどちらの活動が主要かと設問し、仕事と回答した場合には「専ら仕事」ということになる。また、仕事をしながら勉強もしているという個人に関してはどちらの活動が主要かと設問し、仕事と回答した場合には「主に仕事、補完的に勉強」というカテゴリーになる。従って、専ら、主要ないし補完的に仕事をしている人口が就業者という範疇を構成するこの報告書ではこうしたデータの内、主要活動内容のみが取上げられている。尚、活動内容は調査時点から遡った1年間で当該個人が行ってきたものであるとした。

- 産 業……………1. 産業とは調査時点に就業していた事業所の営業種目をいう。あるいは調査前1年間の多くに従事していた事業所の営業種目をいう。
2. 調査時点において休暇や病気等の事由で就業を停止していた場合、それ以前1年間の恒常的産業を記録した。
3. 同一個人が同時に複数の産業に従事している場合には、本人が主要と認めた産業をその個人の産業とした。
4. 産業は大分類と小分類を採用したが、小分類はIBGTが1980年のセンサスで使用した分類を採用し、ブラジル全体との比較を可能とした。

小 分 類……………産 業

1. 農林牧水産漁業
2. 製造・加工業
3. 建築業
4. 工業
5. 商業
6. サービス業
7. 企業関連サービス業
8. 運輸・通信業
9. 社会・福祉関連業
10. 公務
11. その他

- 職 業……………1. 職業とは被調査者が調査時点で有償または無報酬で従事していた仕事の種類を指す。あるいは調査前1年間の大部分、従事していた仕事の種類を

指す。

2. 同一個人が同時に2つ以上の仕事に従事していた場合、その本人が主要と認めた仕事を調査した。
3. 仕事はIBGTが1980年のセンサスにおいて用いた分類を利用し、ブラジル全体との比較を目指した。

- 職業の分類……………
1. 専門・技術
 2. 管理・事務
 3. 農牧蓄水産
 4. 製造・加工・土木・建築
 5. 商業・販売
 6. 運輸・通信
 7. サービス
 8. その他

職業上の地位……………職業上の地位の分類基準はIBGTが1980年にもちいた範疇と基準に準ずる。その範疇は経営主（empregadores）、自営（conta propria）、雇用者（empregados）、家族従業員（nao remunerados）である。

農村部不動産……………ブラジルでは同一ムニシピオ（郡）内において都市部地域内に所在する土地を都市部不動産と規定し、農村部内に所在する土地を農村部不動産と規定している。したがって、農村部に所在する農業用地（農牧・植林）または未利用地、農家宅地等すべての土地が農村部不動産に含まれる。ここではこうした農村部不動産の日系世帯ごとの所有状況が調査された。

家屋の所有状況……………所有（持ち家）とは自己の所有する住宅に居住する場合をいう。但し購入し家賃を支払っている場合も所有と分類した。借家とは家主の所有する住宅に家賃を支払って居住する場合をいう。「家賃を支払わず居住」は親族縁者等が所有する住宅に家賃を支払わずに居住する場合を指す。またこの範疇には借地農や分益農が他人の所有する住宅に居住している場合を含む。社宅とは就業している企業が雇用者のために提供する住宅に居住している場合である。

異民族結婚……………ここでは日系人と非日系人の結婚を指す。異なる国籍所有者間の婚姻ではない。日系というエスニック・カテゴリーに属する個人と他のカテゴリーに属する個人の婚姻である。

団体加入……………日本（系）人によって組織され、その成員も多くが日系人であるような社交、スポーツ、文化、親睦、慈善、宗教、経済・職能団体等を日系団体とし、そこへの加入を設問した。

日本食……………ここでは日本食の規定は被調査者が考える日本食のイメージにまかせ、我々

は日本食が何かを説明していない。

宗教………ここでは宗教を次の範疇に区分した。大多数の日系宗教では複数帰属を認められており、実際に回答でも宗教の複数帰属がみられた。ここではこうした複数帰属の問題は例えば2つの宗教に属するという回答があった場合、2つとも集計に入れられている。

宗教の分類… 1. 信仰する宗教を持たない。

2. カトリック教

3. プロテスタント

4. 日系宗教

5. その他

4と5と回答したものには具体的に宗教名を設問しているが、この報告には現れない。

6. 調査票及び関連書類

1987年度の基本調査の目的はサンプルの確定と基本的な人目学的調査であった。この調査のために我々は4種類の調査票を使用した。即ち、1. 調査地域の世帯配置図、2. 調査対象地域に居住する世帯リスト、3. 日系世帯調査票、4. 系譜調査票である。それぞれの調査票に付き、どのような調査項目が調べられたかを示そう。

1. 当査地域の世帯配置図

当調査のサンプルは厳格に無作為抽出されたサブ・セトルと呼んだ一定の地理的な地域である。どのような地域であるかはIBGTのMAPA DE SETORから判断されたが、それは1980年センサス実施時に作製されたもので、調査時点で既に7年が経過し、しかもその地域内に日系人世帯が存在しているかどうかの情報は全くない。調査員は担当地域の全世帯を1軒1軒訪問して日系世帯があるかどうかを調べることになる。

調査は決して今回だけの単発的なものではなく、調査方法論的にも何度も訪れることになるので、誰が担当してもすぐに日系世帯＝サンプルを見付けられるように、調査地域の世帯配置図を作製した。そこには当然、街路名、公園、学校、公共施設等の存在なども記入され、サンプル世帯への到達を容易とするような配慮がされている。調査地域内にある全ての世帯には世帯番号が付けられ、日系世帯には赤く縁取りがつけられた。また、調査票には当該地域が含まれるムニシピオの市街地からの交通機関、所要時間、金額等が記入され、地図上にはバス停の位置も記入された。また、電化と給水設備の有無の項目、調査員のコメント等の欄が設けられている。

2. 調査対象地域内に居住する世帯リスト

調査員は調査対象地域に存在する全ての世帯―日系・非日系を問わず―を訪問し、当該世帯に日系人が居住しているかどうかを質問した。日系人が調査時に居住していなかった非日系世帯に関しては、世帯主名、性格、生年月日、男女別世帯員数、世帯主の国籍、配偶関係、住所、TEL、住宅の種類が調べられ、当該世帯の調査はこれで完了した。日系人を含む世帯でも同様に調査は開始されるが、日系世帯の場合は調査票3、4へと調査は継続される。

3. 世帯調査票

日系世帯では、すべての世帯員に関する情報が収集された。可能であれば、世帯を代表する世帯主かその配偶者から情報を得た。調査は世帯員の名前(NOME COMPLETO)、世帯主との続柄、性別、生年月日、配偶関係、現在か一時的不在か、日本生れの有無、も

し日本生れの場合は帰化の有無、個人の日系団体加入状況等が調べられた。また、当該世帯の社会階層帰属意識、経済状況―世帯総収入、世帯としての日系団体加入、最も近い親戚ないし交際が最も緊密な知人の名前と住所、T B I が調査された。さらに誰を対象に調査を、何語を使って行ったか、その被調査者が自己の皮膚の色をどのように認識しているかが調べられた。そして当該世帯に居住する日系世帯員に関しては4の調査に進んだ。

4. 系 譜

当該世帯に居住する日系世帯員の一人一人に、自己の祖先・直系尊属の誰が日本人であったかを調べた。例えば、2世であれば、父と母が日本人であり、その系譜的位置を赤で囲み、世代を同定していった。混血でない日系人であれば、すべての出自ラインのどこかに赤の印が現れるわけである。養子や連れ子が日系人であった場合には、実親の系譜を調べることになる。

調査時には調査員は上記の調査票の他に、サンパウロ人文科学研究所からの「調査協力依頼書」、身分証明書、日本語版調査票、地域日本人会が組織されている地域担当の者はその地域日本人会への協力依頼書、IBGTのセトル地図等を持参した。

住年数、このムニピオに移動する以前の居住ムニピオ及び都市部・農村部の区分、移動の理由、移動以前の主要職業、家庭に於ける使用言語―人間関係別、農村部不動産の所有状況及び面積、農地で商業的生産をしている場合には主要生産物、各配偶関係別結婚年、出生児数と生存児数が調査された。

3. 個人調査票

この調査票では10歳以上の世帯員全員を対象として、日常的活動内容、職業、職業上の地位、産業、収入のある仕事の数、学歴、言語の習得状況、日本食への嗜好、宗教、出生地、ブラジル生れの者の都市・農村別出生地及びムニピオ、日本及び目伯以外の場所で誕生した者の、ブラジルへの移住年、グランデ・サンパウロ居住者で当地の誕生者でない者に付き、ここでの居住年数が調査された。職業や産業、宗教等は可能な限り、詳細に質問し、後に行われる分類作業が確かなものとなるよう心がけられた。調査項目は調査に要する時間やサンプルの協力の限界―1回の調査での一等を考慮して、基本的項目のみに抑えられている。今後の、このサンプルを利用した調査がスムーズに行われることが念頭に入れられているわけである。

88年の調査は日系世帯のみを対象に実施されたが、予想以上の移動等があり調査は困難

をきわめた。特にサンパウロ、リオ等の大都市ではサンプル世帯へ接近することさえ、困難があった。しかも移動がこの困難性に拍車をかけることになる。なんとか調査を完了できたのは調査員諸氏の忍耐と努力のおかげである。ここで感謝の意を表したい。

調査票及び関連書類のリスト

*調査票は基本的にすべてポルトガル語で作製されている。しかも、ポルトガル語を理解しえない被調査者の存在も予想されたため、日本語版の調査票も作製した。

— 1987 —

1. questionario A: mapeamento e informacoes basicos do sub - setor pesquisado
2. questionario B: lista geral das unidades domesticas do sub - setor pesquisado
3. questionario C: unidade domestica de descendentes de japoneses
4. questionario D: identificacao da genealogia dos membros descendentes de japoneses
5. 日系人口調査への協力の願い—日本語及びポルトガル語—

— 1988 —

1. questionario 1: alteracao na composicao de unidade domestica
2. questionario 2: familiar
3. questionario 3: individual (parte 1)
individual (parte 2)
4. carta de apresentacao de pesquisador (a)
5. 調査員の紹介書—日本語—

QUESTIONÁRIO A MAPEAMENTO E INFORMAÇÕES BÁSICAS DO SUB-SETOR PESQUISADO

A	N.º MUNICÍPIO	MUNICÍPIO	UF	MUNICÍPIO	MUNICÍPIO	MUNICÍPIO	MUNICÍPIO	MUNICÍPIO	MUNICÍPIO	MUNICÍPIO
<p>② MARA ("COCINAS") DO SUB-SETOR</p>										
<p>CALCULENTONAS DO SUB-SETOR</p> <p>④ TRANSPORTES</p> <p>(1) DISTÂNCIA AO CENTRO</p> <p>(2) TRANSPORTES (ônibus, etc.)</p>										
<p>(3) N.º E. JANE DA LINHA:</p>										
<p>(4) TEMPO DE VIAGEM:</p> <p>(5) TAXA FA:</p> <p>2,2\$</p>										
<p>⑤ SITUAÇÃO DO SUB-SETOR</p> <p>(1) CUNHO DE VILA</p> <p>(2) AREZ JESUSA PROJADA</p> <p>(3) ATIVIDADES RURAIS</p> <p>(4) EDMA RURAL</p>										
<p>⑥ REDE DE S. S. C. PÚBLICA</p> <p>(1) TEMA</p> <p>(2) N.º DE T. E. M.</p>										
<p>⑦ REDE DE ÁGUA</p> <p>(1) TEM</p> <p>(2) N.º DE TEM</p>										
<p>⑧ SERVIÇOS:</p>										

RESUMO DO SUB-SETOR E INFORMAÇÕES BÁSICAS DO SUB-SETOR

QUESTIONÁRIO B: LISTA GERAL DAS UNIDADES DOMÉSTICAS DO SUB-SETOR PESQUISADO

15. UF	16. Município	17. Distrito	18. CIP					19. CIP					20. CIP				
			18.1	18.2	18.3	18.4	18.5	19.1	19.2	19.3	19.4	19.5	20.1	20.2	20.3	20.4	20.5
			18.1 CIP					19.1 CIP					20.1 CIP				
			18.2 CIP					19.2 CIP					20.2 CIP				
			18.3 CIP					19.3 CIP					20.3 CIP				
			18.4 CIP					19.4 CIP					20.4 CIP				
			18.5 CIP					19.5 CIP					20.5 CIP				
			18.6 CIP					19.6 CIP					20.6 CIP				
			18.7 CIP					19.7 CIP					20.7 CIP				
			18.8 CIP					19.8 CIP					20.8 CIP				
			18.9 CIP					19.9 CIP					20.9 CIP				
			18.10 CIP					19.10 CIP					20.10 CIP				
			18.11 CIP					19.11 CIP					20.11 CIP				
			18.12 CIP					19.12 CIP					20.12 CIP				
			18.13 CIP					19.13 CIP					20.13 CIP				
			18.14 CIP					19.14 CIP					20.14 CIP				
			18.15 CIP					19.15 CIP					20.15 CIP				
			18.16 CIP					19.16 CIP					20.16 CIP				
			18.17 CIP					19.17 CIP					20.17 CIP				
			18.18 CIP					19.18 CIP					20.18 CIP				
			18.19 CIP					19.19 CIP					20.19 CIP				
			18.20 CIP					19.20 CIP					20.20 CIP				
			18.21 CIP					19.21 CIP					20.21 CIP				
			18.22 CIP					19.22 CIP					20.22 CIP				
			18.23 CIP					19.23 CIP					20.23 CIP				
			18.24 CIP					19.24 CIP					20.24 CIP				
			18.25 CIP					19.25 CIP					20.25 CIP				
			18.26 CIP					19.26 CIP					20.26 CIP				
			18.27 CIP					19.27 CIP					20.27 CIP				
			18.28 CIP					19.28 CIP					20.28 CIP				
			18.29 CIP					19.29 CIP					20.29 CIP				
			18.30 CIP					19.30 CIP					20.30 CIP				

Atado ao formulário B-17

QUESTIONARIO C: UNIDADE DOMESTICA DE DESCENDENTES DE JAPONESES

C	1. Nome		2. Sexo		3. Data de Nascimento		4. Estado Civil		5. Profissão		6. Escolaridade		7. Nacionalidade		8. Data de Registro	
	Nome	Sobrenome	M	F	DD	MM	AA	1	2	3	4	5	6	7	8	9
2																
3																
4																
5																
6																
7																
8																
9																
10																
11																
12																
13																
14																
15																

QUESTIONÁRIO D: IDENTIFICAÇÃO DA GENEALOGIA DOS MEMBROS DESCENDENTES DE JAPONESES

D	76. U.I.	75. Atividade	74. Distrito	73. Nº. Série	72. Nº. Sub-Série	71. Data
82. Nº. Análise	83. Nome	81. Data				
84. Ancestr. Genealógico						

CENTRO DE ESTUDOS E INVESTIGAÇÕES

CENTRO DE ESTUDOS NIPO-BRASILEIROS

Declaração de Registro Federal de Empresas de 1964, nº 4.119.014 - C. O. C. N. E. Nº 000124/00014
Rua São Joaquim nº 301 - 3º and. - São Paulo - Telefones: 279-5466, 279-5467
CEP 01508 - SÃO PAULO - BRASIL

São Paulo, 8 de setembro de 1987.

Prezados Senhores,

O Centro de Estudos Nipo-Brasileiros, com sede à Rua São Joaquim, 301 - 3º (CEP 01508 - Tel. 011 279-5466), São Paulo, SP, está presentemente realizando uma pesquisa objetivando o levantamento da população de japoneses e de seus descendentes residentes no Brasil.

A parte principal dessa pesquisa já foi realizada no período de 16 a 25 de julho p. passado, devendo ser feita uma pesquisa complementar de 8 a 13 corrente.

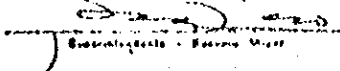
Procedendo-se à extração de amostras, a área onde reside V.Sus. foi uma das indicadas. Por este motivo, desejamos solicitar a V.Sus. o especial obsequio de colaborar com a nossa pesquisa fornecendo as informações solicitadas pelo nosso pesquisador, pelo que somos antecipadamente gratos.

Obviamente, as informações prestadas serão tratadas com todo sigilo como deve acontecer em qualquer pesquisa deste tipo.

Agradecendo a preciosa colaboração de V.Sus., subscrevemo-nos

Atenciosamente

CENTRO DE ESTUDOS NIPO-BRASILEIROS


Especialista - Escola Muzet

CENTRO DE ESTUDOS NIPO-IRABELEIROS
Unidade de Estudos Nipo-Irabeleiros - C. D. E. N. I. - 01072-500
Rua Rio de Janeiro nº 191 - 2º andar - São Paulo - Telefone 278-0772
CEP 01008 - SÃO PAULO - BRASIL

新聞、

貴報方におかれましては、日々御忙のことと存じ、御礼の申し上げです。
さて、先日、貴報にて御通知しましたように、ただ今、サンパウロの日本文学研究で
日本文学の日本代表に引続き、ブラジル日本人の社会、経済的調査を実施して行いま
す。この調査及び研究報告を持って、貴報方の研究をお伺い致しております。

LUI, HEISUO, SAKATA (NO. 6,072,500) は、
日本文学研究の代表者として御通知いたしました調査員であります。貴報方、御礼申上
げますが、貴報の調査の趣意と目的を御理解いただき、貴報の調査に御協力くださ
るよう、心より御願い申し上げます。

敬々

1988年7月10日

サンパウロ日本文学研究

倉本 裕 啓

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14		15	16														
													17	18																
NOME COMPLETO														19	20	21	22	23	24											
GRAU DE PARCENTESCO														25	26	27	28	29	30											
DATA DE NASCIMENTO														31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42					
SEXO														43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54					
ESTADO CIVIL														55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66					
MUNICÍPIO														67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78					
ESTADO														79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90					
CATEGORIA														91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102					
1. MUNICÍPIO DE SETUBAL														S	19	S	S	S	S	19	S	S	S	S	S	19	S	S	S	S
2. MUNICÍPIO DE SETUBAL														F	19	N	N	N	N	19	N	N	N	N	N	19	N	N	N	N
3. MUNICÍPIO DE SETUBAL														M	19	S	S	S	S	19	S	S	S	S	S	19	S	S	S	S
4. MUNICÍPIO DE SETUBAL														F	19	N	N	N	N	19	N	N	N	N	N	19	N	N	N	N
5. MUNICÍPIO DE SETUBAL														M	19	S	S	S	S	19	S	S	S	S	S	19	S	S	S	S
6. MUNICÍPIO DE SETUBAL														F	19	N	N	N	N	19	N	N	N	N	N	19	N	N	N	N
7. MUNICÍPIO DE SETUBAL														M	19	S	S	S	S	19	S	S	S	S	S	19	S	S	S	S
8. MUNICÍPIO DE SETUBAL														F	19	N	N	N	N	19	N	N	N	N	N	19	N	N	N	N
9. MUNICÍPIO DE SETUBAL														M	19	S	S	S	S	19	S	S	S	S	S	19	S	S	S	S
10. MUNICÍPIO DE SETUBAL														F	19	N	N	N	N	19	N	N	N	N	N	19	N	N	N	N

DECLARAÇÃO DE RECEITA DE RENDAS DE 1977

QUESTIONÁRIO 8. FAMILIAR

UF	MUNICÍPIO	DIGIT	BRUM	FAVARI	Q	Nº 10	MOO	DATA	INSCRIÇÃO
2									
(1) A casa em que se lê reside é de sua propriedade? 1 proprietário 2 casa ou cômodo de aluguel 3 outros S								(1)	01 02 03
(2) Quantos dormitórios tem sua casa? 1 dormitórios no caso de dormitório coletivo (*) 1 dormit. USO COMUM								(2)	
(3) Desde quando reside nesta casa? desde ID .. U								(3)	
(4) Desde quando reside neste município? desde ID .. V								(4)	
(5) Onde residia antes de mudar-se para cá? mesmo 4 zona urbana outro VI 6 zona urbana município 5 zona rural município UF X 7 zona mista								(5)	04 05 06 07
(6) Qual o principal motivo de sua mudança para cá? 8 trabalho 9 casamento 10 estudo 11 outros Y								(6)	08 09 10 11
(7) Qual era sua ocupação principal antes de mudar-se para cá? 12 Ocupações Téc. Cient. etc 16 Consel. e Ativ. Auxiliares 13 Ocupações Administrativas 17 Transportes e Comunicações 14 Agropecuária, Prod. Extrativ. 18 Prestação de Serviço 15 Ind. Transp. e Constr. Civil 19 Ocupaç. Mal Definidas, não declaradas 20 Outros Z Decorever:								(7)	12 13 14 15 16 17 18 19 20
Qual o idioma usado em casa?								(8)	21 22 23
(8) cotidianamente 21 português 22 japonês 23 ambos		(9) entre o casal 24 português 25 japonês 26 ambos		(10) casal e filhos 27 português 28 japonês 29 ambos		(11) casal e pais 30 português 31 japonês 32 ambos		(9)	24 25 26 27 28 29 30 31 32
(12) O Sr. tem propriedade rural? Qual é a área? ZV								(12)	
O Sr. produz para comercialização? Quais são suas principais culturas?								(13)	
(13) ZX (14) ZY (15) ZZ								(13)	
Número do membro esposo		ano de casamento		n.º filhos nascidos		n.º filhos vivos			
AA	AB	AC	AD	AE					
BA	BB	BC	BD	BE					
CA	CB	CC	CD	CE					
DA	DB	DC	DD	DE					
S	T	U	V	W	X	Y	Z	ZW	ZX
AE	BA	BU	BC	BU	BU	CA	CU	CU	CU
									X

QUESTIONÁRIO 3: INDIVIDUAL (PARTE II)

3	UF	MUNICÍPIO	CEP	RAIO	ESTADO	Q	R	L	DATA	ENTREVISTADO							
									/ /								
ATIVIDADE																	
Qual é a atividade principal a que o Sr. se dedica atualmente?																	
(1)	1 trabalho doméstico	2 prêmios	3 estudo	4 procurando emprego	5 outros A						(1)	01	02	03	04	05	
(2)	6 exclusivamente				7 principalmente							(2)	06	07			
(3) (Para quem respondeu 7) tem alguma atividade complementar?																	
(3)	8 trabalho doméstico	9 prêmios	10 estudo	11 procurando emprego	12 outros B						(3)	08	09	10		11	12
OCUPAÇÃO																	
(4) Qual sua ocupação principal nos últimos 12 meses?																	
13 Ocupações Téc. Cient. etc 17 Comércio e Ativ. Auxiliares 14 Ocupações Administrativas 18 Transportes e Comunicações 15 Agropecuária, Prod. Extrativ. 19 Prestação de Serviços 16 Ind. Transf. e Constr. Civil 20 Ocupaç. Mal Definidas, não declaradas																	
Descrever:																	
POSIÇÃO NA OCUPAÇÃO																	
(5) Posição que ocupa na ocupação principal																	
21 empregador 22 por conta própria 23 empregado 24 trabalho familiar 25 outros C																	
Descrever:																	
RAMOS DE ATIVIDADE																	
(6) Ramos de Atividade do local (Unidade Produtiva) onde trabalha																	
26 Atividades Agrícolas 32 Serv. Aux. das Ativ. Econôm. 27 Indus. de Transformação 33 Transportes e Comunicações 28 Indústria da Construção 34 Atividades Sociais 29 Atividades Industriais 35 Administração Pública 30 Comércio de Mercadorias 36 Outras Atividades 31 Prestação de Serviços D																	
Descrever:																	
(7) A quantos trabalhos remunerados o Sr. se dedica?																	
37 zero 38 um 39 dois 40 três 41 quatro 42 outros E																	
Descrever:																	

QUESTIONÁRIO II INDIVIDUAL (PARTE II)

3										DATA		INSCRIÇÃO																					
UF	MUNICÍPIO	CIDADA	SEXO	ESTADO	Q	M	RAÇA	IDADE	DATA	INSCRIÇÃO	INSCRIÇÃO	INSCRIÇÃO																					
(8) Grau de escolaridade										(8)	43																						
43 não estudou em escola																																	
(9) No Brasil										(9)	44	45	46																				
44 1.º grau (primário, ginásio)																																	
45 2.º grau (colégio)																																	
46 Ensino Superior (Curso F)																																	
(10) 47 não concluiu 48 formou-se 49 frequentou H...º ano (escola)										(10)	47	48	49																				
(11) No Japão										(11)	50	51	52																				
50 "shogaku" 51 "kusho shinsai chugaku" 52 "kyuuteichu gijyugaku"											53	54																					
53 "kyuseiko-eimon-tandai" 54 "shikkyu dargaku"																																	
(12) 55 não concluiu 56 formou-se 57 frequentou H...º ano (escola)										(12)	55	56	57																				
Qual o grau de conhecimento do idioma?										(13)	58	59	60																				
<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">Japonês</th> <th colspan="2">Português</th> </tr> <tr> <th>(13) falar</th> <th>(14) ler/escrever</th> <th>(15) falar</th> <th>(16) ler/escrever</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>58 nada</td> <td>61 nada</td> <td>64 nada</td> <td>67 nada</td> </tr> <tr> <td>59 um pouco</td> <td>62 um pouco</td> <td>65 um pouco</td> <td>68 um pouco</td> </tr> <tr> <td>60 suficiente-mente</td> <td>63 suficiente-mente</td> <td>66 suficiente-mente</td> <td>69 suficiente-mente</td> </tr> </tbody> </table>										Japonês		Português		(13) falar	(14) ler/escrever	(15) falar	(16) ler/escrever	58 nada	61 nada	64 nada	67 nada	59 um pouco	62 um pouco	65 um pouco	68 um pouco	60 suficiente-mente	63 suficiente-mente	66 suficiente-mente	69 suficiente-mente	(14)	61	62	63
Japonês		Português																															
(13) falar	(14) ler/escrever	(15) falar	(16) ler/escrever																														
58 nada	61 nada	64 nada	67 nada																														
59 um pouco	62 um pouco	65 um pouco	68 um pouco																														
60 suficiente-mente	63 suficiente-mente	66 suficiente-mente	69 suficiente-mente																														
										(15)	64	65	66																				
										(16)	67	68	69																				
(17) Comida Japonesa										(17)	70	71	72																				
70 come raramente 71 come de vez em quando 72 come frequentemente																																	
(18) Religião Qual(is) religião(ões) o Sr. segue?										(18)	73	74	75																				
73...Ao tem 74 católica 75 protestante											76	77																					
76 seta de origem japonesa 77 outras																																	
Qual? J K																																	
Onde o Sr. nasceu?										(19)	78	79	80																				
(19) 78 Brasil 79 Japão 80 outros PA																																	
para quem respondeu 78 Em que município (e Estado)										(20)	81	82																					
(20) Município N UF P																																	
81 zona rural 82 zona urbana																																	
para quem respondeu 79 ou 80										(21)																							
(21) Quando chegou ao Brasil? Ano de 10 O																																	
(22) Apenas para os residentes na Grande São Paulo e não nascidos nesta										(22)																							
Há quanto tempo reside neste município? R anos																																	
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R																																	

CENTRO DE ESTUDOS NIPO-BRASILEIROS

Distrito de Vendas, Funchal, Caixa Postal 10.000, C. P. C. M. P. M. 01011-000
Rua São Joaquim, nº 351 - 5.º and. - 01034 - Telefone: 270 8238
C.A.P. 01008 - SÃO PAULO - BRASIL

São Paulo, 10 de julho de 1988

Prezado Senhor,


Conforme tivemos a oportunidade de comunicar a V.Sa, por correspondência remetida previamente, o Centro de Estudos Nipo-Brasileiros, dando continuidade à pesquisa populacional feita no ano passado, está realizando a segunda etapa dos estudos, fazendo pesquisas sócio-econômicas.

Para isso, o nosso pesquisador LUIS EDUARDO SARAIA (RG 6.072.300) está efetuando a visita a V.Sa.

Certificando-se da sua identidade, solicitamos-lhe o obséquio de atendê-lo, colaborando conosco no bom êxito da pesquisa.

Orcos pela atenção, subscrevemo-nos com a grata consideração e distinto apreço.

Atenciosamente,



Yatsuzo Yamamoto
Presidente
Centro de Estudos Nipo-Brasileiros

CENTRO DE ESTUDOS NIPO-BRASILEIROS

Departamento de Ciências Sociais e Humanas - C.O. C.M.P. - Universidade de São Paulo
Rua Rio Jordão nº 301 - 1º andar - sala 24 - Telefone: 279-5465
CEP 01009 - SÃO PAULO - BRASIL

日系人口調査への謝辞

前略、

皆様方におかれましては、甚々御清旨のことと御禮申し上げます。

さて、当サンパウロ人文科学研究所（サンパウロ市サンジョアキン街381、電話279-5465）では、現在、日系人口実態調査を実施致しております。第一回の基本調査は本年7月16日～25日の10日間で、既に実施致しましたが、今回の補充調査を9月8日～13日にかけて実施することに致しました。そして今回の補充調査では、貴下がお住まいになっている地域が、新たに調査地区として選定されました。

御多忙中のこととは存じ上げますが、拙どもの調査研究に御協力いただきまます様、何卒宜しく御禮申し上げます。

尚、お向きいたしました事は今回の研究のみ以外には使用されることとはございませんので、御協力の際、御禮申し上げます。

草々

1987年9月8日

サンパウロ人文科学研究所

会長 山本 徳道

JICA